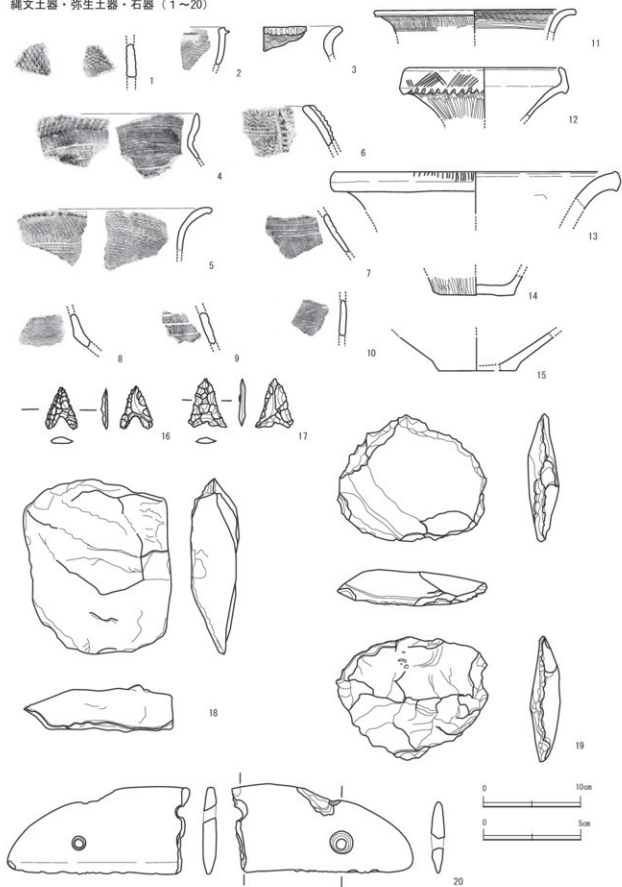
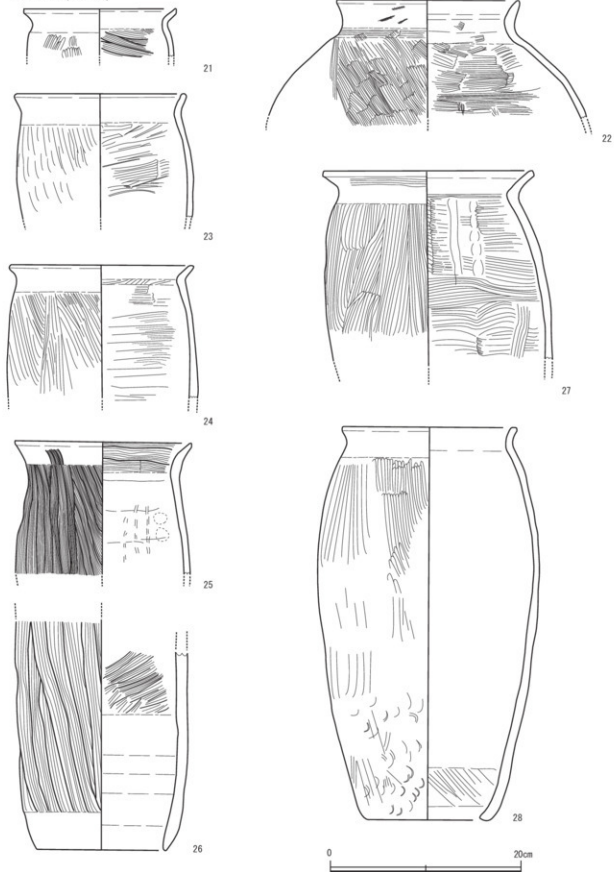


縄文土器・弥生土器・石器 (1~20)



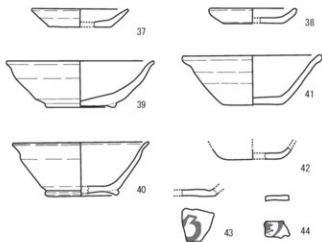
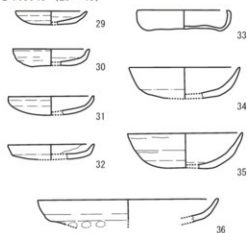
第52図 出土遺物実測図1 (1~15 1:4、16~20 1:2)

S H5074 (21~28)

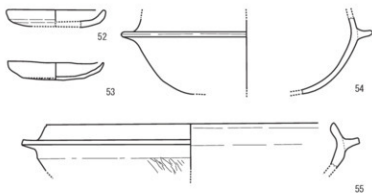
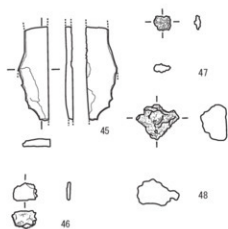


第53図 出土遺物実測図2 (1:4)

S K 5049 (29~48)

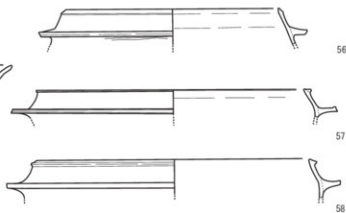
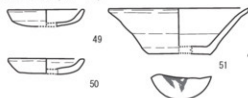


S K 5038 (52~55)



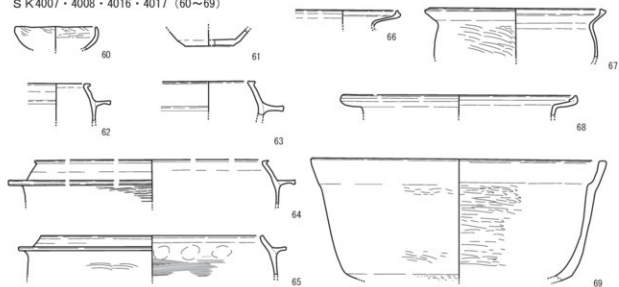
S K 5046 (56~59)

S K 5063 (49~51)



第54图 出土遺物実測図3 (1:4)

SK4007・4008・4016・4017 (60~69)

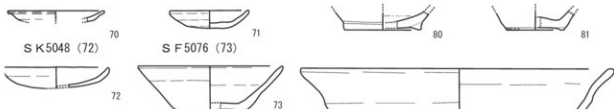


SK4024 (70)

SK5070 (71)

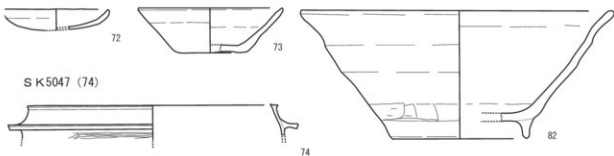
SK6023 (80)

SK6015 (81・82)



SK5048 (72)

SF5076 (73)

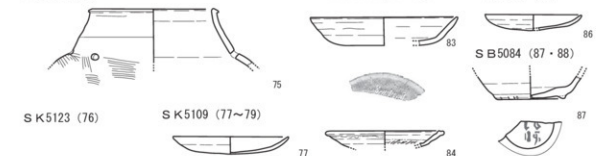


SK5047 (74)

SK5055 (75)

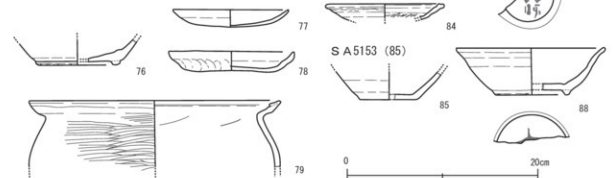
SB4001 (83・84)

SB6028 (86)

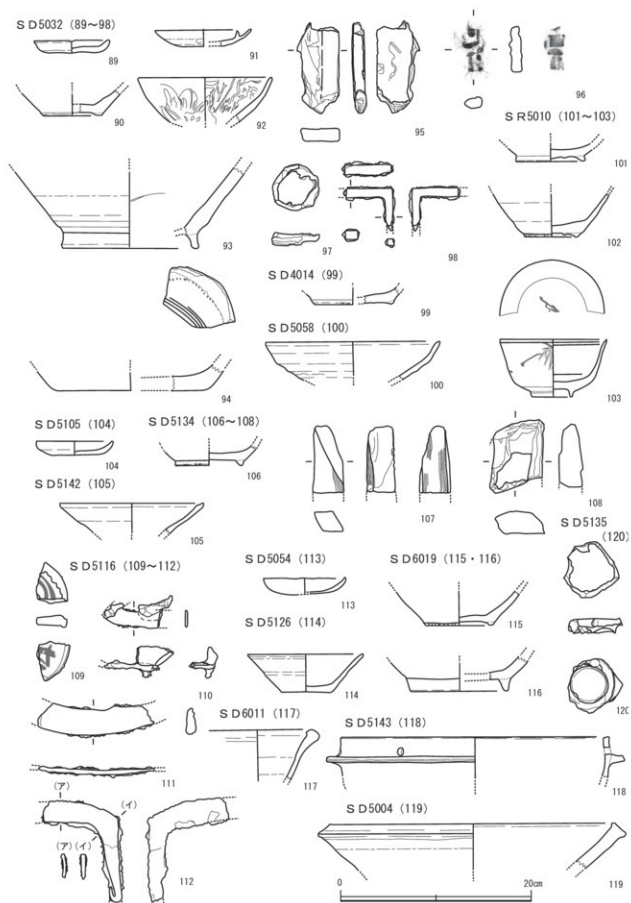


SK5123 (76)

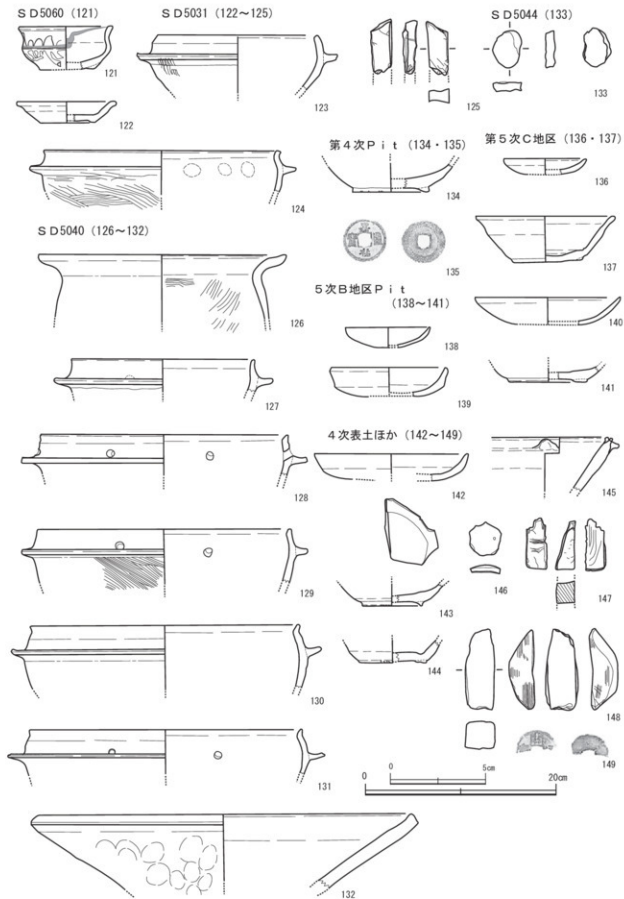
SK5109 (77~79)



第55図 出土遺物実測図4 (1:4)

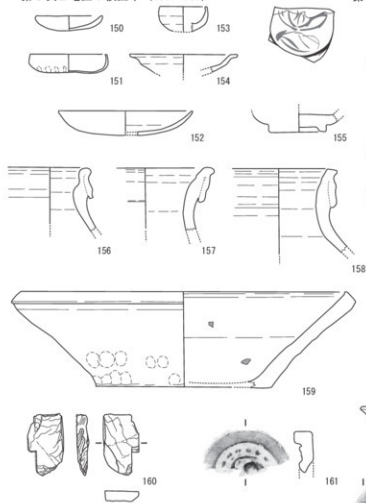


第56図 出土遺物実測図5 (1:4)

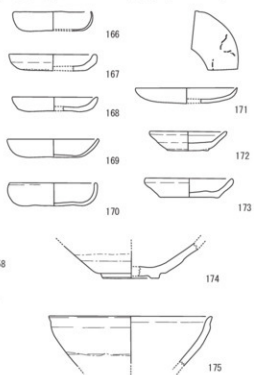


第57図 出土遺物実測図6 (1:4、135・149は1:2)

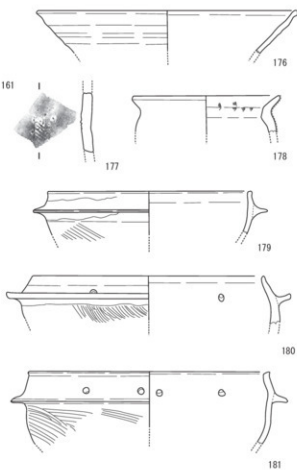
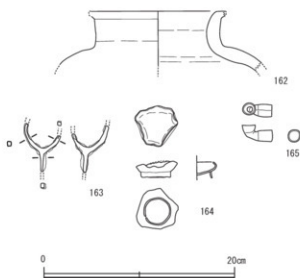
第5次B地区I 検出中 (150~161)



第5次B地区JA 17~20検出中 (166~181)

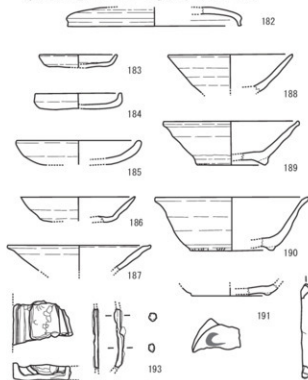


第5次B地区JA・JB15、16検出中 (162~165)

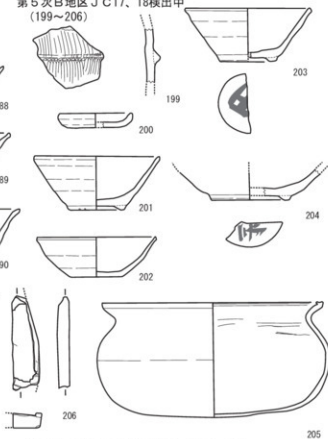


第58図 出土遺物実測図7 (1:4)

第5次B地区J B17~20検出中 (182~198)



第5次B地区J C17、18検出中 (199~206)



第5次B地区J D以东検出中 (207~221)

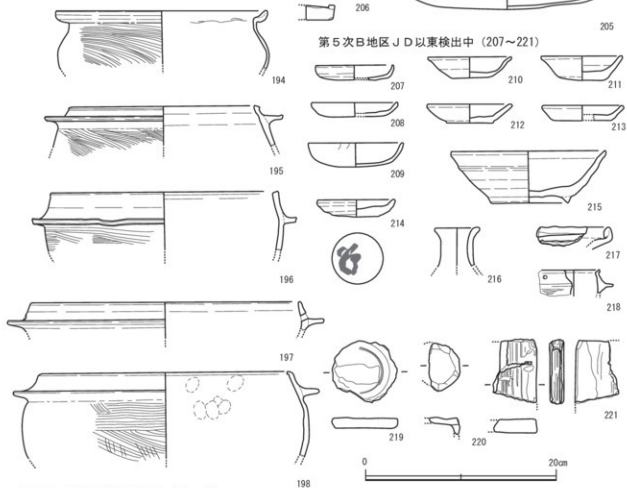
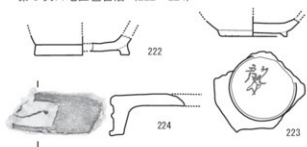
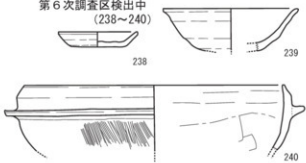


図59 出土遺物実測図B (1:4)

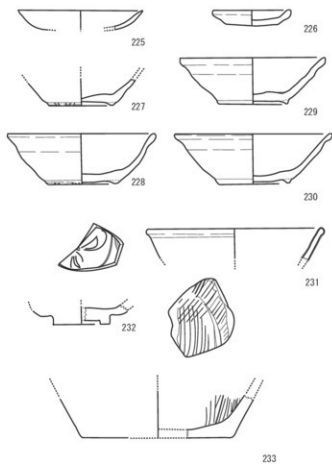
第5次A地区包含層 (222~224)



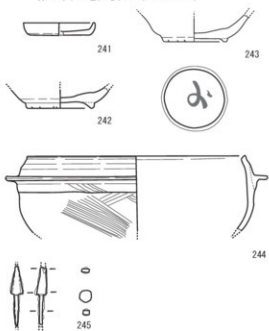
第6次調査区検出中
(238~240)



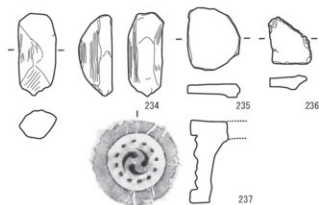
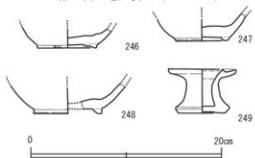
第5次C地区検出中 (225~237)



第5次B地区表土 (241~245)



第5次C地区表土 (246~249)



第60回 出土物実測図9 (1:4)

報告番号	実測番号	種類 器種等	調査 次数	小 地区	遺構名	計画面 (cm)	残存度	調査・技法の特徴	出土 状況	色調	特記事項
1	049-96	縄文土器	5C	15	南原遺跡		小片	表面ボジティブな横円文	密良	外：橙SYR6/6 内：にぶい黄橙10YR7/3	
2	049-94	縄文土器	5B	1Y 15	遺構検出中		口小片	素文突起帯付	密良	内：にぶい黄橙10YR7/3	
3	020-04	弥生土器 壺	5B	1F 19	遺構検出中		口小片	外：ハケメ、口縁短部刻み 内：ハケメ	密良	にぶい黄橙10YR7/3	
4	049-01	弥生土器 壺	5B	1B 18	Pt11		口小片	外：ハケメ、受口上部刺突 内：ハケメ	密良	外：浅黄橙10YR8/3 内：7.5YRにぶい橙7/3	山形口縁
5	049-05	弥生土器 壺	5C	15	遺構検出中		口小片	外：ハケメ、磨損横溝文、口縁短部刻み 内：ハケメ、磨損波状文	密良	にぶい黄橙10YR7/4	外面煤付着
6	049-02	弥生土器 無蓋壺	5B	1T 20	Pt1		口小片	外：棒状浮文貼付・刻み、磨損波状文、磨損直線文、口縁短部刻み	密良	褐灰10YR4/1へにぶい黄橙10YR7/2	内面風化により調整不明
7	049-08	弥生土器 壺	5C	1W 14	S0516		小片	外：ハケメ、磨損波状文 内：ナツ	密良	外：橙SYR7/6へにぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙7.5YR7/4	
8	049-03	弥生土器 壺	5C	1G 11	遺構検出中		小片	外：ハケメ、磨損波状文 内：ナツ	密良	浅黄橙10YR8/3	
9	049-04	弥生土器 壺	5C	1H 11	遺構検出中		小片	外：磨損波状文、波線文 内：ナツ	密良	外：暗灰2.5Y5/2 内：にぶい黄橙10YR7/3	
10	049-07	弥生土器 壺	5C	1S 16	Pt3		小片	外：ハケメ、縁刻み	密良	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/3	
11	012-04	弥生土器 壺	5B	1C 16	S05044	口径21.0	口2/12	外：ハケメ、口縁短部ヨコナダ 内：口縁部ハケメ、磨損波状文	密良	浅黄橙10YR8/4	
12	013-01	弥生土器 受口縁頭壺	5B	1I 18	P1	口径16.6	口1/12	外：ハケメ、ミガキ、口縁部刺突 縁部文、下端刻み 内：不明	密良	褐7.5YR7/6	内面風化により調整不明
13	031-03	弥生土器 広口壺	5B	1C 19	SK3063	口径29.6	口1/12	外：ナツ、ケズリ、口縁部刺突 内：ナツ、ハケメ	やや密	褐SYR7/6	全体に風化・剥離。調整不明瞭
14	025-96	弥生土器 壺	5C	1K 14	S05141	底径8.0	底完存	外：ハケメ、ナツ 内：風化層	やや密	にぶい橙7.5YR6/4	
15	025-91	弥生土器 壺	5B	1E 19	遺構検出中	底径8.0	底2/12	内外：風化（特に内面風化著）	やや密	外：灰黄橙10YR6/2 内：灰白5Y7/1	外面、煤付着
16	013-05	石製品 石鏝	5次		検出中	長2.2 幅1.6 厚0.3	—	—	—	—	重さ 0.59g 石質 サマサイト
17	051-09	石製品 石鏝	4次	1S 22	風祭木	長2.55 幅2.0 厚0.3	—	—	—	—	重さ 1.11g 石質 サマサイト
18	024-01	石斧	5B	1J 16	S05032	長9.0 幅7.6 厚2.6	—	2方向使用	—	—	重さ 217.86g 石質 サマサイト
19	024-03	石斧 前鋸	5B	1J 13	S05032	長6.5 幅7.8 厚1.6	—	側面全面刃取り	—	—	重さ 85.82g 石質 サマサイト
20	036-04	石製品 石布疋	5C		表採	長4.5 幅9.0 厚0.7	—	穴3ヶ所（2箇所残存）、両刃	—	—	重さ 51.27g 石質 緑色片岩
21	034-02	土師器 壺	5B	1D 19	SE074 7f	口径16.0	口2/12	外：ハケメ、ヨコナダ 内：ハケメ、ヨコナダ	密良	外：にぶい橙SYR7/4、 にぶい橙7.5YR7/3 内：にぶい橙10YR7/3	外面煤付着、外面風化
22	044-01	土師器 壺	5B	1T 17	SK3071	口径19.0	口2/12	外：ヨコナダ、ハケメ 内：ハケメ、ヨコナダ	密良	褐SYR6/6	
23	045-01	土師器 壺	5B	1S 16	SE074	口径17.4	口5/12	内外：ハケメ、ヨコナダ	密良	にぶい黄橙10YR7/4	土管状土製品か？ 口縁部一部煤付着
24	045-02	土師器 壺	5B	1T 17	SE074	口径19.0	口5/12	外：ハケメ、ヨコナダ 内：ナツ、ハケメ、ヨコナダ	密良	にぶい橙7.5YR7/4	土管状土製品か
25	034-03	土師器 壺	5B	1S 18	SE074 №.4	口径18.6	口2/12	外：ハケメ、ヨコナダ 内：オオエ、ナツ、ハケメ	密良	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：にぶい黄橙10YR6/4	土管状土製品か 外面煤付着
26	034-01	土師器 土管状土製品	5B	1S 18	SE074 №.3	底径6~6.7	底12/12	外：ハケメ、ナツ 内：ハケメ、オオエ、ナツ	密良	にぶい橙10YR7/4	釜みあり 外面一部煤付着
27	033-01	土師器 土管状土製品	5B	1S 18	SE074 №.2	口径21.8	口8/12	外：ハケメ、ヨコナダ 内：ハケメ、オオエ、ヨコナダ	密良	にぶい橙7.5YR7/4へ 10YR7/4	外面煤ナダ風のハケメ
28	035-01	土師器 土管状土製品	5B	1S 18	SE074 №.1	口径18.0 高さ41.5	口2/12 底12/12	外：ハケメ？、ナツ、ヨコナダ 内：ハケメ、ナツ、ヨコナダ	密良	褐7.5YR7/6	風化のため調整不明瞭 側面一部に煤付着
29	010-03	土師器 小皿	5B	1S 18	SK3049	口径7.4	口4/12	内外：ナツ、ヨコナダ	密良	褐7.5YR6/6	中北勢 全面剥離
30	023-03	土師器 小皿	5B	1T 17	SK3049	口径8.0	口3/12	外：オオエ、ナツ、ヨコナダ 内：ナツ、ヨコナダ	密良	にぶい橙7.5YR7/4	中北勢
31	010-04	土師器 小皿	5B	1S 18	SK3049	口径9.0	口3/12	内外：ヨコナダ、ナツ	密良	褐7.5YR6/6	中北勢 外面風化、被熱により赤化
32	010-96	土師器 小皿	5C	1T 17	SK3049	口径9.2	口5/12	外：ナツ、ヨコナダ 内：ヨコナダ	密良	にぶい黄橙10YR6/3	中北勢 内面粘土輪襷痕跡

第13表 遺物観察表1

報告番号	実測番号	種類・副種等	調査地区	小地区	遺構名	計測値 (cm)	残存状況	調整・技法の特徴	粘土	構成	色調	特記事項
33	008-04	土師器 小皿	JB	JB17	SK5049	口径9.6 高さ2.2	口7/12	外: オサエ、ナデ 内: ナデ	密	良	黄褐色10YR8/4	南伊勢 内面黒煙痕あり 外面黒
34	010-02	土師器 皿	JB	JB18	SK5049	口径11.4	口2/12	外: ナデ、ヨコナデ 内: ヨコナデ	密	良	にぶい黄褐色10YR7/4	
35	008-05	土師器 皿	JB	JB17	SK5049	口径12.0	口3/12	内外: ナデ、ヨコナデ	密	良	橙7.5YR7/6	
36	027-03	土師器 皿	JB	JB19	SK5049 P10	口径19.0	口2/12	外: オサエ、ヨコナデ 内: ヨコナデ	密	良	外: にぶい黄褐色10YR7/4 内: 橙5YR7/6	中北勢 内面黒化
37	025-02	海部 山茶碗小皿	JB	JB18	SK5049 P1	口径10.0	口1/12	外: ロクロナデ、底部赤切り 底2/12 内: ロクロナデ	密	良	灰白5Y7/1	足張-5 底面厚く焼き痕、外口~内面自然釉
38	039-01	海部 山茶碗小皿	JB	JB18	SK5049	口径9.0	口1/12	外: ロクロナデ、底部赤切り 底4/12 内: ロクロナデ	密	良	灰5Y7/1	足張-7 or 8 底面厚く焼き痕、外口~内面自然釉
39	011-03	海部 山茶碗	JB	JB18	SK5049	口径15.4 高さ4.9	口5/12	外: ロクロナデ、底部赤切り、高台貼付後ナデ 内: ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	足張-6 外口縁部~内面自然釉 口縁部2小穴けあり(輪花の模様か?)
40	039-02	海部 山茶碗	JB	JB18	SK5049	口径14.2	口1/12	外: ロクロナデ、底部赤切り、高台貼付後ナデ 内: ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	足張-7
41	010-01	海部 山茶碗	JB	JB18	SK5049	口径14.4 高さ3.2	口6/12	外: ロクロナデ、底部赤切り、モミガク織あり 内: ロクロナデ	密	良	灰黄2.5YR7/2	足張-10? 高台が剥離している可能性あり
42	037-05	海部 山茶碗	JB	JB18	SK5049	直径5.6	底4/12	外: ロクロナデ、底部赤切り 内: ロクロナデ	密	不良	灰白2.5YR/3	足張-12 全体黒化
43	020-02	海部 山茶碗	JB	JB18	SK5049 P1	底部小片	—	底部赤切り	密	良	灰黄2.5Y7/2	足張7 or 8 外底底部黒痕あり「乃」
44	037-06	海部 山茶碗	JB	JB17	SK5049	小片	—	—	密	良	にぶい黄褐色10YR7/3	黒痕あり「乃」か
45	041-01	石製品 碇	JB	JB18	SK5049	長9.8 幅3.1 厚0.8	—	割れた側面に付着物、転用か	—	—	—	重さ 37.51g あと、砥石に転用?
46	047-04	金属製品 銅造り切片	JB	JB18	SK5049	長1.9 幅2.4 厚0.1	—	—	—	—	—	重さ 2.84g
47	031-02	鉄滓	JB	JB18	SK5049	長1.5 幅1.5 厚0.7	—	—	—	—	—	重さ 1.71g
48	031-01	鉄滓	JB	JB18	SK5049	長4.0 幅3.6 厚2.8	—	—	—	—	—	重さ 49.06g
49	019-04	土師器 小皿	JB	JB19	SK5063	口径8.0	口3/12	外: オサエ、ナデ、ヨコナデ 内: ヨコナデ	密	良	黄褐色7.5YR8/4	中北勢 底みあり
50	020-03	土師器 小皿	JB	JB19	SK5063	口径8.0	口3/12	内外: ナデ、ヨコナデ	密	良	灰白10YR8/2	中北勢 底みあり
51	011-02	海部 山茶碗	JB	JB19	SK5063	口径14.6	口3/12	外: ロクロナデ、底部赤切り 底4/12 内: ロクロナデ、ナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	足張-7 底みあり、内面自然釉、高台剥離 底部黒痕あり(高台剥離後)、花押か
52	019-03	土師器 小皿	IX	IX17	SK5038 床	口径10.0	口3/12	外: ナデ、ヨコナデ 内: ナデ	密	良	にぶい黄褐色7.5YR7/4~にぶい黄褐色10YR6/3	中北勢 底みあり
53	013-03	土師器 皿	IX	IX18	SK5038 壁周縁	口径約10.0 高さ1.9	口12/12	外: オサエ、ナデ 内: ナデ	密	良	黄褐色10YR8/4	南伊勢 底み大
54	018-02	土師器 羽釜	IX	IX18	SK5038 床下	口径不明 脚径26.2	脚2/12	外: ナデ?、脚部貼付後ナデ 内: ナデ、ケズリ	密	良	橙7.5YR7/6	外面は剥離?ハケメなし 底部黒付着
55	018-01	土師器 羽釜	IX	IX18	SK5038床	口径30.0	口1/12	外: ハケメ?、脚部貼付後ナデ、口縁部ヨコナデ 内: ナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい黄褐色10YR7/3	外面黒下付着
56	043-03	土師器 羽釜	JB	JB19	SK5046 炭化物内	口径22.0	口2/12	外: ハケメ、脚部貼付後ナデ、ヨコナデ 内: ヨコナデ	密	良	にぶい黄褐色10YR7/3	南伊勢 脚部黒下付着
57	036-01	土師器 羽釜	JB	JB19	SK5046 炭化物内	口径23.6~27.0	口5/12	外: 脚部貼付後ナデ、ヨコナデ 内: オサエ、ナデ	密	良	黄褐色10YR8/3	底みあり 脚部黒付着
58	011-01	土師器 羽釜	JB	JB19	SK5046 北西	口径28.4	口1/12	外: 脚部貼付後ナデ、口縁部ヨコナデ 内: ナデ	密	良	黄褐色10YR8/3	南伊勢 脚部黒付着
59	042-02	陶器 甕	JB	JB19	SK5046	口径39.7	口2/12	外: ロクロナデ、オサエ 内: ロクロナデ、オサエ、ナデ	密	良	灰褐色5YR5/2~灰7.5YR5/1	滑澤-11
60	081-08	土師器 小皿	J	J20	SK4017 北西	口径8.4	口9/12	内外: ナデ	密	良	外: 灰褐色7.5YR5/2 内: 灰褐色5YR4/2	
61	081-01	海部 山茶碗	J	J22	SK4008	直径5.0	底4/12	外: ロクロナデ、底部赤切り 内: ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	足張-10
62	082-02	土師器 羽釜	J	J20	SK4018 黄褐色土	口縁部小片	—	外: ヨコナデ、脚部貼付後ナデ、ナデ 内: ヨコナデ、工具ナデ	密	良	にぶい黄褐色7.5YR7/4	南伊勢 外底、口縁部、脚部黒下付着
63	082-03	土師器 羽釜	J	J21	SK4017 北西	口縁部小片	—	外: ヨコナデ、脚部貼付後ナデ、ナデ 内: ヨコナデ	密	良	外: にぶい黄褐色10YR5/3 内: 黄褐色7.5YR8/4	南伊勢 外底、脚部黒下付着
64	083-04	土師器 羽釜	J	J22	SK4008	口径少なく不確定	口1/12	外: ヨコナデ、脚部貼付後ナデ 内: ヨコナデ、ナデ	密	良	外: にぶい黄褐色7.5YR5/3 内: 灰褐色5YR4/2	南伊勢 外底、脚部黒下付着

第14表 遺物観察表2

報告番号	天測器種等	種別	調査年度	小地区	遺構名	計測値(㎝)	残存度	調整・技法の特徴	出土	検成	色調	特記事項
65	053-03	土師器 羽釜	4K	J0 21	SK4008 東マ	口径23.0	Ⅱ/12	外:ヨコナデ、舞部貼付後ナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、オサエ、ハケメ	密良	外:灰黄2.5YR4/2 内:灰黄緑10YR3/3	中北勢 外直、口縁部、舞部下窪付着	
66	053-02	土師器 鉢	4K	J0 20	SK4007 北東	口縁部小一	Ⅰ	内外:ヨコナデ	密良	外:焼灰7.5YR4/1 内:灰黄7.5YR4/2	南伊勢 外直口縁部下窪付着	
67	053-01	土師器 鉢	4K	J5 20	SK4017	口径18.0	Ⅰ/12	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	密良	外:黒2/0 内:にぶい・燈7.5YR6/4	南伊勢 外面直・灰化物付着	
68	052-04	土師器 内瓦跡?	4K	J0 21	SK4008 東マ	口径25.0	Ⅰ/12	内外:ヨコナデ	密良	外:焼灰5YR4/1 内:焼赤灰2.2YR3/1	三河? 外面口縁部・舞部下窪付着	
69	052-01	瓦質土師器	4K	J0 22	SK4007	口径31.0	Ⅱ/12	外:ヨコナデ、工具ナデ、ケズリ 内:ヨコナデ、ミガキ	密良	外:灰黄緑10YR5/2 内:RCN4/0	外面口縁部・舞部下窪付着 外面窪付着のため調整不明瞭	
70	051-02	陶器 山茶碗小皿	4K	JV 21	SK4024	歪みのため 径不確定	Ⅳ/12	内外:ロクロナデ	密良	灰白2.5Y7/1	尾根-6 口縁歪みあり	
71	010-05	陶器 山茶碗小皿	5B	JB 18	SK5070 P1	口径8.2 高さ1.9	完存	外:ロクロナデ、底部赤切り 内:ロクロナデ、仕上げナデ	密良	灰白2.5Y7/1	尾根-6	
72	026-06	土師器 小皿	5B	JA 18	SD0048	口径11.0	Ⅲ/12	外:オサエ、ナデ、ヨコナデ 内:ナデ、ヨコナデ	密良	灰黄緑10YR5/3	京都系?中北勢? 歪み大、内 外に窪付着、口縁部部追加付着	
73	029-04	陶器 山茶碗	5B	IA 18	BF0076	口径15.0 高さ4.5	Ⅲ/12	外:ロクロナデ、底部赤切り 内:ロクロナデ、ナデ	密良	灰白5Y7/2	尾根-10	
74	030-03	土師器 羽釜	5B	JB 19	SK5047	口径26.0 舞部径30.2	Ⅰ/12	外:ハケメ、舞部貼付後ナデ、ヨコナデ 内:ヨコナデ	密良	灰黄緑10YR5/3	南伊勢 舞下窪付着	
75	012-02	土師器 茶釜	5B	J1 15	SK5055	口径12.6	Ⅲ/12	外:ナデ、ハケメ、口縁部ヨコナデ、焼成 前穿孔 内:ナデ、ヨコナデ	密良	にぶい・黄緑10YR7/3	中北勢 外面窪付着	
76	037-02	陶器 山茶碗	5C	I1 17	SK123	底径8.0	底4/12	外:ロクロナデ、底部赤切り、高台貼付後 ナデ、モミガク板 内:ロクロナデ	密良	灰白2.5Y7/1	尾根-6 歪みあり、内面自然釉	
77	015-04	土師器 皿	5C	IB 18	SK5109	口径約12.0 高さ1.8	Ⅱ/12	外:オサエ、ナデ 内:ナデ	密良	灰黄緑10YR5/3	京都系 歪みあり	
78	015-03	土師器 皿	5C	IB 18	SK5109	口径13.0 高さ2.1	Ⅲ/12	内外:オサエ、ナデ、ヨコナデ	密良	灰黄緑10YR5/4	南伊勢 少し歪みあり	
79	016-01	土師器 椀	5C	IB 18	SK5109	口径26.0	Ⅰ/12	外:ハケメ、ヨコナデ 内:工具ナデ、ヨコナデ	密良	にぶい・黄緑10YR7/3	南伊勢 内面黒化	
80	056-01	陶器 山茶碗	6K	I2	SK0023	高台径8.0	底2/12	外:ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部赤 切り 内:ロクロナデ	密良	灰黄2.5Y7/2	尾根-3or4 内面黒化	
81	054-02	陶器 山茶碗	6K	7	SK0015	高台径6.0	底6/12	外:ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部赤 切り、モミガク板 内:ロクロナデ	密良	灰黄2.5YR7/2	尾根-7	
82	055-01	山茶碗 片口鉢	6K	7	SK0015	口径33.0 高台径14.0	Ⅱ/12 底4/12	外:ロクロナデ、ロクロナデ、高台貼付 後ナデ 内:ロクロナデ	粗良	灰黄2.5Y7/2	尾根-6 内面自然釉	
83	051-07	土師器 皿	4K	JV 21	P10	口径15.4 高さ2.95	Ⅱ/12	内外:ヨコナデ、ナデ	密良	灰黄緑10YR5/4	京都系	
84	051-06	陶器 煎豆	4K	JV 21	P10	口径12.4	Ⅲ/12	内外:ロクロナデ、施釉	密良	釉:黄緑2.5Y5/3、灰白 5Y7/2 素地:灰黄 2.5Y7/2	古瀬戸後Ⅱ	
85	037-01	陶器 山茶碗	5C	IN 17	P3	底径6.0	底3/12	外:ロクロナデ、底部赤切り 内:ロクロナデ、ナデ	粗良	灰白2.5Y7/2	尾根-8or9	
86	054-01	土師器 皿	6K	GT	F1	口径10.0	Ⅳ/12	内外:ヨコナデ、ナデ	密良	灰黄緑10YR5/4	南伊勢	
87	029-02	陶器 山茶碗	5B	J1 9	P2	高台径7.0	Ⅳ/12	外:ロクロナデ、底部赤切り、高台貼付後 ナデ、モミガク板 内:ロクロナデ	密良	灰白2.5Y7/1	尾根-6 内面自然釉、黒書あり	
88	012-01	陶器 山茶碗	5B	J1 9	P2	口径15.4	Ⅳ/12	外:ロクロナデ、底部赤切り、高台貼付後 ナデ、モミガク板 内:ロクロナデ	密良	灰黄2.5Y7/2	尾根-6 底部黒書あり	
89	038-02	土師器 小皿	5B	JE 14	SD0032	口径8.0 高さ1.4	Ⅳ/12	外:オサエ、ナデ、ヨコナデ 内:ナデ、ヨコナデ	密良	にぶい・燈7.5YR6/4	中北勢 口縁の一部が内に押 え入れられる(成形時の歪みか重 固的なものか不明)	
90	038-07	陶器 山茶碗	5B	IG 16	SD0032	口径径6.2	底4/12	外:ロクロナデ、底部赤切り、高台貼付後 ナデ、モミガク板 内:ロクロナデ	密良	灰白2.5Y7/1	尾根-7	
91	023-02	陶器 灯明皿	5B	JA 15	SD0032	口径10.0	Ⅰ/12	外:ロクロナデ、ロクロナデ、施釉 内:ロクロナデ、受部ケズリ出し、施釉	密良	釉:明赤焼5YR5/6 断面:灰黄2.5Y7/2	美濃(豊10~11)	
92	022-02	陶器 刺毛目茶碗	5B	JD 14	SD0032	口径14.0	Ⅱ/12	内外:ロクロナデ、施釉	密良	釉:民キリーブ7.5Y6/2 断面:にぶい・黄緑 10YR7/4	瀬戸(豊8~9)	
93	008-01	陶器 山茶 碗片口鉢	5B	J1 16	SD0032	高台径14.0	底1/12	外:ロクロナデ、ロクロナデ、高台貼付 後ナデ 内:ロクロナデ	粗良	灰黄2.5Y7/3	尾根-6 内面使用により黒化	
94	023-01	陶器 摺鉢	5B	JD 14	SD0032	底径16.0	底2/12	外:ロクロナデ、施釉(鉄釉) 内:ロクロナデ、スリ目、施釉	密良	外:灰黄緑10Y6/2 断面:にぶい・黄2.5Y6/3	瀬戸(豊2) 内面使用により著しく黒化	

第15表 遺物観察表3

報告番号	実測番号	種類 器種等	調査 回数	小 地区	遺構名	計画値 (cm)	残存度	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
95	041-02	瓦葺土器 破	16	JL	SD5032	長9.6 幅4.4 厚1.2	—	—	—	—	黄灰2.5Y/2 新面：焼7.5Y/6	重さ 71.51g
96	048-06	土製品 人形	14	JR	SD5032	高さ7.5 2.2 厚1.1	—	—	密	良	黄灰：にぶい黄緑10YR8/4	重さ 8.12g
97	021-1	加工円板	14	JR	SD5032	—	—	側面打ち欠き	密	良	輪：黒5.2Y/1 新面：にぶい焼7.5YR/3	重さ 31.81g 天目茶碗（古瀬戸IV古）高台
98	046-04	金属製品 鏝	15	JR	SD5032	長10.1 幅 1.5 厚1.6	—	—	—	—	—	重さ 27.13g サビ付最大
99	051-03	陶器 山茶碗	4 次	JL 17	SD4014	高台径8.0	底4/12	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底面赤切り、モミゴザ痕 内：ロクロナデ	密	良	黄灰2.5Y/2	尾根-6
100	043-02	陶器 平碗	11	JJ	SD5058	口径18.0	口1/12	内面：ロクロナデ、施輪	密	良	輪：オリーブ黄5Y6/3～暗オリーブ7.5B4/3 素地：にぶい黄緑10YR6/3	古瀬戸IV古
101	038-06	陶器 山茶碗	15	SA 15	SD5010	高台径7.2	底2/12	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y/2	尾根-3 外底部に重ね焼き痕？
102	026-08	陶器 山茶碗	14	JL	SD5010	高台径5.6	底8/12	外：ロクロナデ、底部赤切り、高台貼付後ナデ、モミゴザ痕 内：ロクロナデ、ナデ	密	良	黄灰2.5Y/2	尾根-6 内面自然輪
103	029-01	織器 燗火焼	14	SA 14	SD5010	口径11.0 高さ6.0	口6/12	外：ロクロナデ、割り出し高台、施輪、染付 内：ロクロナデ、施輪、染付	密	良	輪、断面：灰白5Y/7	瀬戸・美濃（豊-11）
104	015-06	土器 小皿	15	SA 14	SD5105	口径8.0 高さ1.5	口3/12	内外：オサエ、ロクロナデ	密	良	黄緑10YR8/3	京都系？
105	014-03	陶器 山茶碗	12	JC 12	SD5142	口径15.0	口2/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y/1	尾根-10 外口～内面厚く自然輪
106	025-04	陶器 山茶碗	13	JA 13	SD5134	高台径7.0	底完存	外：ロクロナデ、底部赤切り、高台貼付後ナデ、モミゴザ痕 内：ロクロナデ、ナデ	密	良	灰白5Y/7/1	尾根-6
107	017-02	石製品 砥石	13	JA 13	SD5134	長7.1 幅3.1 厚2.7	—	下部ワレ 全面少し使用、一面を物によく使用	—	—	—	重さ 66.55g
108	017-04	石製品 砥石7石片	13	JA 13	SD5134	長7.8 幅2.7 厚2.3	—	先端面取り	—	—	—	重さ 149.54g
109	039-03	陶器 鉄絵皿	11	JL 17	SD5116	小片	—	施輪	密	良	輪：灰白7.5Y/7/1にぶい黄緑10YR6/3 新面：黄灰2.5Y/3	豊-1 磨きあり 花押か
110	046-01	金属製品 火打金	14	JR	SD5116	長6.8 幅2.8 厚0.8	—	—	—	—	—	くっついてくる長石は大打石か 重さ 36.44g
111	046-02	金属製品 鏝	14	JR	SD5116	長12.2 幅 3.1 厚0.9	—	—	—	—	—	小石が多く鎌倉 重さ 43.35g
112	046-03	金属製品 鏝	14	JR	SD5116	長17.0 幅 3.1 厚0.7	—	—	—	—	—	片面は少し地金が見える 重さ 47.72g
113	026-07	土器 小皿	19	JJ 19	SD5064	口径8.6	口2/12	内外：オサエ、ナデ	密	良	黄緑10YR8/4	南伊勢 部みあり
114	014-04	陶器 山茶碗	16	JR	SD5126	口径12.0 高さ4.0	口2/12 底7/12	外：ロクロナデ、底部赤切り 内：ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y/1	尾根-11 外口～内面薄く自然輪
115	055-02	陶器 山茶碗	6 次	GT 17	SD5021	高台径7.0	口 12/12	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部赤切り、モミゴザ痕 内：ロクロナデ、ナデ	密	良	黄灰2.5Y/3	尾根-5 外面煤付着
116	054-05	陶器 山口鉢	6 次	GT 17	SD5019	高台径10.0	底2/12	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ 内：ロクロナデ	密	良	黄灰2.5Y/2	尾根-6
117	055-03	陶器 椀鉢	6 次	GR 18	SD5011	小片	—	—	密	良	黒焼7.5YR/3	瀬戸（豊-11）
118	040-02	土器 羽釜	11	JL	SD5143	口径28.0	口3/12	外：ハケメ？、脚部貼付後ナデ、焼成前穿孔 内：ロクロナデ	密	良	黄灰2.5Y/3	中北勢 磨みあり、脚下部煤付着
119	042-01	陶器 山口鉢	4 次	JF 15	SD5004	口径29.6	口1/12	外：ロクロナデ、オサエ 内：ロクロナデ	やや 密	密	内外：にぶい赤黒5Y6/4 口縁部：にぶい赤黒 2.5YR4/3	常滑型式 内面使用による磨耗
120	020-07	青磁 加工円板	14	IX 14	SD5135	—	—	高台削出、施輪	密	良	輪：灰オリーブ7.5Y/3 新面：焼7.5Y/7/1	重さ 60.14g 黒根、側面・高台打ち欠き
121	010-07	陶器 持籠形赤伊	17	JG 17	SD5060	口径10.0	口3/12	外：ロクロナデ、底部赤切り、脚部貼付、施輪（灰輪ツケカケ） 内：ロクロナデ	密	良	黄灰2.5Y/3 輪：灰オリーブ7.5Y/3	古瀬戸IV古 脚ひとつのみ残、外面重ね焼き痕あり
122	026-01	陶器 椀鉢	11	JR	SD5031	口径10.4 高さ2.2	口2/12	外：ロクロナデ、割り出し高台、施輪（鉄輪） 内：ロクロナデ、施輪（鉄輪）	密	良	輪：焼7.5YR/3 黒 7.5YR1.7/1 新面：黄緑10YR8/3	大塚2 内面面に重ね焼き（トナン）痕あり
123	013-02	土器 羽釜	18	JL 17	SD5031	口径16.6	口2/12	外：ミガキ？、脚部貼付後ナデ、口縁部ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい黄緑10YR7/4	中北勢 体部外面ミガキ？脚下部煤付着

第16表 遺物観察表4

報告番号	実測番号	種類	調査年度	小地区	遺構名	計測値(m)	残存度	調査・技法の特徴	粘土	構成	色調	特記事項
124	027-01	土師器 羽釜	58	18	S05031	口径24.6	□1/12	外：ハケメ、脚部貼付後ナデ、ヨコナデ 内：オサエ、ナデ、ヨコナデ	密良	浅黄	2.5Y7/4	中北勢 脚下部付着
125	040-04	右製品 砥石	58	11	S05031	長5.0 幅2.0 厚1.2	—	2面表面剥離 2面使用	—	—	—	重さ 20.75g
126	012-03	土師器 甕	58	17	S05039	口径26.0	□2/12	内外：風化のため調査不明	粗良	浅黄緑	10YR8/3	古代
127	008-02	土師器 羽釜	58	15	S05040	口径19.0	□1/12	外：脚部貼付後ナデ、口縁部ヨコナデ、焼成前穿孔 内：ナデ、ヨコナデ	密良	にぶい黄橙	10YR6/4	中北勢 脚下部付着 脚部付位置上部に穴あり
128	040-01	土師器 羽釜	58	16	S05040	口径26.0	□1/12	外：脚部貼付後ナデ、ヨコナデ、焼成前穿孔 内：ナデ、ヨコナデ	密良	にぶい黄橙	10YR7/3	中北勢 脚下部付着
129	009-03	土師器 羽釜	58	16	S05040	口径26.6	□1/12	外：ハケメ、脚部貼付後ナデ、口縁部ヨコナデ、焼成前穿孔 内：ナデ、ヨコナデ	密良	にぶい黄橙	10YR6/4	中北勢 脚下部厚く付着しハケメ不明
130	009-01	土師器 羽釜	58	16	S05040	口径28.0	□2/12	外：ナデ、脚部貼付後ナデ、口縁部ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密良	浅黄緑	10YR8/4	中北勢 外面剥離か、ハケメなし、ナデ?
131	009-02	土師器 羽釜	58	16	S05040	口径28.6	□1/12	外：オサエ、脚部貼付後ナデ、口縁部ヨコナデ、焼成前穿孔 内：ナデ、ヨコナデ	密良	明黄緑	10YR7/6	中北勢 脚下部付着、調査不明、ハケメなし
132	030-01	陶器 片口鉢	58	14	S05039	口径39.0	□2/12	外：オサエ、ナデ 内：ロクロナデ	密良	外：橙5YR6/6-に ぶい7.5YR3/3 内：浅黄緑10YR8/4	常滑(12) 11型式 使用により摩耗	
133	027-04	加工片板	58	16	S05044	長3.8 幅2.8 厚1.0	—	打ち欠き後研磨	—	—	—	重さ 17.68g 常滑
134	041-05	陶器 山茶碗	4次	11	P8	高台径8.0	底3/12	外：ロクロナデ、底部赤切り、高台貼付後ナデ、モミガラ紙 内：ロクロナデ	密良	灰白	5Y7/1	尾原-4 内面自然焼
135	050-01	銭貨	4次	18	P20	径2.4 厚さ1.4	—	—	—	—	—	葛城通宝(北宋)
136	015-05	土師器 小皿	58	13	P3	口径8.6	□5/12	外：オサエ、ヨコナデ 内：ナデ	密良	中底：橙5YR7/6 口縁：にぶい黄橙 10YR7/4	中北勢	
137	018-02	陶器 山茶碗	58	11	P1	口径14.4 高さ4.9	□16/12 底定常	外：ロクロナデ、底部赤切り、高台貼付後ナデ、モミガラ紙 内：ロクロナデ	粗良	灰白	5Y7/1	尾原-6 内面並焼き痕
138	013-04	土師器 小皿	58	18	S05031 下層P2	口径9.0	□5/12	内外：ナデ	密良	外：浅黄緑 7.5YR3/3 内 底：灰白10YR8/2	南伊勢	
139	008-03	土師器 皿	58	18	P4	口径12.0	□2/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密良	にぶい黄橙	10YR7/4	中北勢 内面黒変
140	027-02	土師器 皿	58	10	P2	口径18.0	□1/12	外：ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	密良	灰白	2.5YR/2	京都系
141	038-08	陶器 山茶碗	58	11	P1	高台径8.2	底2/12	外：ロクロナデ、底部赤切り、高台貼付後ナデ 内：ロクロナデ	密良	灰白	2.5YR/1	尾原-5 全体風化
142	019-05	土師器 皿	58	11	磨土	口径16.0	□2/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密良	にぶい橙	7.5YR6/4	中北勢
143	051-05	陶器 山茶碗	4次	11	表土層 削	高台径6.2	底2/12	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部赤切り、モミガラ紙 内：ロクロナデ	密良	外：灰黄 2.5Y7/2 内：にぶい黄橙 10YR7/2	尾原-6 内外黒付着、内面摩耗、転用磁?	
144	051-04	陶器 山茶碗	4次	10	包含層	高台径7.0	底4/12	外：ロクロナデ、高台貼付後ナデ、底部赤切り、モミガラ紙 内：ロクロナデ	密良	にぶい黄橙	10YR7/3	尾原-7 底部内面に墨、付着物あり
145	053-05	陶器 片口鉢	4次	11	表土層 削中	口縁部小片	—	オサエ、ナデ	密良	橙	2.5YR6/6	常滑10(9) 型式
146	019-07	加工片板	58	16	溝中	長3.6 幅3.4 厚0.7	—	打ち欠きのみ	密良	断面：浅黄5YR7/3 輪：灰白5Y7/1	重さ 11.22g 伊万里?	
147	040-03	右製品 砥石	4次	11	表土	長5.3 幅2.1 厚1.9	—	2面割れたあと使用? 2面よく使用	—	—	—	重さ 31.06g
148	017-01	右製品 砥石	58	11	溝中	長8.4 幅3.1 厚3.1	—	全面使用	—	—	—	重さ 108.79g
149	050-02	銭貨	4次	18	表土	厚1.0	—	—	—	—	—	開元通宝(唐)
150	026-03	土師器 小皿	58	17	遺構検出中	口径7.0 高さ1.5	□4/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密良	浅黄緑	10YR8/3	南伊勢 内外に煤付着、並み大
151	019-01	土師器 小皿	58	18	遺構検出中	口径8.0 高さ2.0	□4/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密良	浅黄緑	10YR8/3	南伊勢 並みあり
152	019-02	土師器 皿	58	18	遺構検出中	口径14.0	□2/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密良	灰白	10YR8/2	京都系? 中北勢? 外面煤付着、付着物あり
153	026-04	陶器 束燗	58	15	遺構検出中	口径4.8	□3/12	内外：ロクロナデ、施釉	密良	輪：橙赤褐 2.5YR3/3 断面：灰白10YR8/2	信楽	
154	026-02	陶器 小皿	58	18	遺構検出中	口径11.2	□3/12	内外：ロクロナデ、施釉	密良	輪：にぶい黄 2.5YR/4 断面：灰黄2.5YR/2	常滑	

第17表 遺物観察表5

報告番号	実測番号	種類 器種等	調査 時期	小 地区	遺構名	針測値 (cm)	残存度	調整・技法の特徴	粘土	焼成	色調	特記事項
155	020-05	磁器 青磁碗	58	15	遺構検出中	底部小片	底10/12	高台削出、施釉	密	良	軸：灰オリーブ5Y6/2 断面：5Y6/1	重さ 80.49g
156	021-05	陶器 甕	58	15	遺構検出中	口縁部小片	—	—	密	良	にぶい・燈5Y6/4	信楽
157	037-03	陶器 甕	58	15	遺構検出中	口縁部小片	—	—	密	良	にぶい赤褐色2.5Y6/4～5Y6/4	信楽
158	021-06	陶器 甕	58	15	遺構検出中	口縁部小片	—	—	密	良	にぶい・燈5Y6/4	信楽
159	028-02	陶器 片口鉢	58	15	遺構検出中	口径34.0	0/2/13	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ	粗	良	外：にぶい赤褐色5Y6/4 内：浅黄緑7.5Y6/3	常滑 12 (11) 型式 内面半分から下風化、外面保存層
160	037-04	石製品 砥石	58	15	遺構検出中	長6.4 幅3.7 厚1.1	—	部分的に使用	—	—	—	重さ 39.78g
161	048-01	軒丸瓦	58	15	遺構検出中	瓦当1/3	—	—	密	良	灰7.5Y5/1～浅黄 2.5Y7/3	—
162	028-01	陶器 甕	58	15	遺構検出中	口径14.0	0/2/12	内外：ナデ	粗	良	浅黄緑10YR3/3	信楽 内外面保存層
163	047-01	金属製品 鉄杖鉄製品	58	15	遺構検出中	長5.1 幅4.1 厚0.8	—	—	—	—	—	重さ 8.98g
164	047-06	金属製品 青銅小皿	58	10	検出中	長4.3 幅1.5 厚0.2	—	—	—	—	—	重さ 21.26g 内面に黒色付着物あり、輪花
165	047-05	金属製品 博多唐首 (博多唐原)	58	15	遺構検出中	長3.0 幅1.2 厚0.1	—	—	—	—	—	分析あり (真鍮) 重さ 4.92g
166	026-05	土師器 小皿	58	18	遺構検出中	口径6.0	0/3/12	内外：オサエ、ナデ	密	良	浅黄緑10YR3/4	南伊勢 歪みあり
167	003-03	土師器 小皿	58	18	遺構検出中	口径6.0	0/5/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ	密	良	浅黄緑10YR3/4	中北勢 歪みあり
168	038-03	土師器 小皿	58	20	南壁ト レンチ	口径6.6	0/3/12	内外：ナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい・燈7.5Y6/4	外面摩耗 内面付着物あり
169	002-03	土師器 小皿	58	18	遺構検出中	口径5.7 高さ1.9	0/11/12	内外：ナデ	密	良	灰黄2.5Y7/3	南伊勢
170	003-01	土師器 小皿	58	18	遺構検出中	口径9.0～10.0 高さ2.4	0/3/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	良	灰白10YR3/2	南伊勢 歪みあり
171	002-02	土師器 小皿	58	17	遺構検出中	口径10.4	0/3/12	内外：ナデ	密	良	燈7.5Y6/6	京都系 内面黒褐色付着 内外黒面あり
172	011-04	山茶碗 小皿	58	18	遺構検出中	口径7.9 高さ2.0	0/2/12	外：クロロナデ、底部赤切り 内：クロロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	尾瀬-6 内面自然釉
173	011-05	山茶碗 小皿	58	18	遺構検出中	口径9.0	0/3/12	外：クロロナデ、底部赤切り 内：クロロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	尾瀬-6 外口～内面に厚く自然釉
174	041-04	陶器 平碗	58	18	遺構検出中	高台径6.0	底3/12	外：クロロナデ、ロクロケズリ、削 出高台、底部赤切り、上部施釉 内：クロロナデ、施釉	密	軸：灰黄2.5Y7/2 断面：灰黄10YR6/3	古瀬戸後IV古	
175	003-04	陶器 平碗	58	18	遺構検出中	口径17.0	0/2/12	外：クロロナデ、ロクロケズリ、施 釉 内：クロロナデ、施釉	密	良	軸：灰白5Y7/2～オリー ブ5Y5/4 断面：灰白5Y7/1	古瀬戸後IV古
176	043-01	陶器 直縁大皿	58	17	遺構検出中	口径27.0	0/1/12	内外：クロロナデ、施釉	やや 密	良	軸：オリーブ黄5Y6/3 断面：灰黄2.5Y6/3	古瀬戸後IV古
177	048-05	陶器 甕	58	18	遺構検出中	小片	—	—	密	良	断面：2.5Y灰黄6/2 内：灰褐色5Y6/2	常滑印田
178	022-01	土師器 甕	58	17	遺構検出中	口径18.0	0/2/12	外：外面風化、割傷により調整不明 内：ハケメ、ナデ	やや 粗	良	外：にぶい・燈7.5Y6/3 内：灰黄緑10YR6/2	古代
179	002-06	土師器 羽釜	58	17	遺構検出中	口径21.0	0/1/12	外：ハケメ、髹貼付後ナデ、口縁部 ヨコナデ、焼成前穿孔 内：工具ナデ、ヨコナデ	密	良	灰黄2.5Y7/3	中北勢 内外うすく保存層
180	023-04	土師器 羽釜	58	17	遺構検出中	口径24.0	0/1/12	外：ハケメ、髹貼付後ナデ、ヨコ ナデ、焼成前穿孔 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	灰白2.5Y6/2	中北勢 髹下保存層
181	003-05	土師器 羽釜	58	19	遺構検出中	口径25.0	0/2/12	外：ハケメ、髹貼付後ナデ、口縁部 ヨコナデ、焼成前穿孔 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい・黄緑10YR7/3	中北勢 外面髹下厚く保存層 ハケメ不明瞭
182	004-01	灰土器 甕	58	17	遺構検出中	口径18.0	0/1/12	内外：クロロナデ 頂部：ナデ	やや 密	良	灰5Y6/1～灰オリーブ 5Y6/2	—
183	006-01	土師器 小皿	58	18	遺構検出中	口径8.0	0/2/12	内外：ナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい・黄緑10YR7/3	中北勢
184	004-04	土師器 小皿	58	20	遺構検出中	口径9.0	0/3/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい・黄緑10YR7/3	中北勢
185	006-03	土師器 皿	58	19	遺構検出中	口径13.0	0/1/12	外：ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	良	にぶい・燈7.5Y6/6	中北勢 外面に黒風あり

第18表 遺物観察表6

報告番号	実測番号	種類 器種等	調査 次数	小 地区	遺構名	計測値 (cm)	残存度	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
186	005-04	土師器	58	J8	遺構検出中	口径12.0 高さ4.9	□12/12	内外：ヨコナゲ、オサエ	密	良	灰白2.5YR7/4	京師系？ 内外のヨコナゲが細なため大きき
187	004-03	土師器	58	J8	遺構検出中	口径15.0	□12/12	内外：ナゲ、ヨコナゲ	密	良	灰白黄緑10YR7/2	京師系 内外面底あり
188	004-05	海部 山茶碗	58	J8	遺構検出中	口径13.0	□4/12	内外：ロクロナゲ	密	良	灰白5Y7/1	尾屋-10 外面下部保付着
189	004-02	海部 山茶碗	58	J8	遺構検出中	口径14.0	□12/12	外：ロクロナゲ、底部糸切り、高台貼付後ナゲ、モミガク板 内：ロクロナゲ	密	良	灰白2.5Y7/1	尾屋-6 見込み周辺に自然蝕 内面磨？汚れ？あり。転用蝕
190	006-02	海部 山茶碗	58	J8	遺構検出中	口径16.0	□1/12 底1/12	外：ロクロナゲ、高台貼付後ナゲ、モミガク板 内：ロクロナゲ	密	良	灰黄2.5Y7/2	尾屋-6 口縁部内外自然蝕
191	038-05	海部 山茶碗	58	J8	遺構検出中	高台径8.0	底2/12	外：ロクロナゲ、底部糸切り、高台貼付後ナゲ、モミガク板 内：ロクロナゲ	密	良	灰白2.5Y7/1	尾屋-6 磨書あり
192	024-02	石製品 硯	58	J8	遺構検出中	長4.2 幅6.1 厚1.7	—	表面ほとんど磨れていない	—	—	—	重さ 66.66g
193	047-03	金属製品 釦	58	J8	遺構検出中	長6.3 幅0.8 厚0.8	—	—	—	—	—	重さ 2.71g
194	005-02	土師器 鉢	58	J8	遺構検出中	口径22.0	□11/12	外：ヨコナゲ、ハケメ 内：ヨコナゲ、ナゲ	密	良	浅黄緑10YR8/3	南伊勢 口縁外保付着、外面磨付着
195	006-05	土師器 羽釜	58	J8	遺構検出中	口径19.0	□3/12	外：ハケメ、髷貼付後ナゲ、ヨコナゲ 内：オサエ、工具ナゲ、ヨコナゲ	密	良	灰白黄緑10YR7/4	南伊勢 外面保付着
196	006-04	土師器 羽釜	58	J8	遺構検出中	口径23.6	□3/12	外：ハケメ、髷貼付後ナゲ、口縁部ヨコナゲ 内：工具ナゲ	密	良	黄2.5YR/3	中北勢 口縁部、髷部近みあり 外面保付着 内面灰化物付着
197	005-01	土師器 羽釜	58	J8	遺構検出中	口径28.0	□11/12	外：髷部貼付後ナゲ、ヨコナゲ、横成前穿孔 内：ナゲ、ヨコナゲ	密	良	浅黄緑10YR8/3	中北勢 外面磨下厚く保付着し調整不明
198	007-01	土師器 羽釜	58	J8	遺構検出中	口径26.0	□11/12	外：ハケメ、髷貼付後ナゲ、口縁部ヨコナゲ 内：オサエ、工具ナゲ	密	良	黄2.5Y7/3	中北勢 磨下、底厚く付着
199	022-05	土師器 カマド？	58	J8	遺構検出中	小片	—	外：ミガキ、髷貼付後ナゲ、ミガキ 内：オサエ、ナゲ	密	良	灰白黄緑7.5YR8/4	中北勢
200	004-06	土師器 小皿	58	J8	遺構検出中	口径7.6	□3/12	外：オサエ、ナゲ、ヨコナゲ 内：ナゲ	密	良	灰白黄緑7.5YR7/4	中北勢
201	002-02	海部 山茶碗	58	J8	遺構検出中	口径13.0 高さ1.0	□1/12 底完存	外：ロクロナゲ、底部糸切り、高台貼付後ナゲ、モミガク板 内：ロクロナゲ、ナゲ	粗	良	灰黄2.5Y7/2	尾屋-7 見込み部と、体部の間にへラ切の跡 込みあり 内面自然蝕
202	002-01	海部 山茶碗	58	J8	遺構検出中	口径12.4 高さ4.2	□6/12 底完存	外：ロクロナゲ、底部糸切り 内：ロクロナゲ	密	良	灰黄2.5Y7/2	尾屋-10 外面保付着 底部焼成時の割れあり 外口～内面自然蝕多い
203	007-02	海部 山茶碗	58	J8	遺構検出中	口径13.0	□3/12 底6/12	外：ロクロナゲ、底部糸切り、高台貼付後ナゲ、モミガク板 内：ロクロナゲ、ナゲ	密	良	灰黄2.5Y7/2	尾屋-7 内面に薄く自然蝕 底部磨書あり 高台ほとんど削がれ、残1.3cm
204	020-01	海部 山茶碗	58	J8	遺構検出中	高台径8.0	底4/12	外：ロクロナゲ、底部糸切り、高台貼付後ナゲ、モミガク板 内：ロクロナゲ、ナゲ	密	良	灰白2.5Y7/1	尾屋-5 外面底部磨書あり「口阿」または「口門」
205	032-01	土師器 鉢	58	J8	遺構検出中	口径23.0 高さ13.0	□3/12	外：ナゲ？、ヨコナゲ 内：ナゲ？、タズリ？、ヨコナゲ	密	良	浅黄緑10YR8/4	南伊勢 外面保付着でハケメ不明 内面保付着
206	030-02	石製品 硯	58	J8	遺構検出中	長10.0 幅 3.0 厚1.5	破片	表面よく使用している	—	—	—	重さ 54.47g
207	007-04	土師器 小皿	58	J8	遺構検出中	口径8.0	□3/12	外：ナゲ、ヨコナゲ 内：ヨコナゲ	密	良	浅黄2.5Y7/3	中北勢
208	005-03	土師器 小皿	58	J8	遺構検出中	口径9.0	□4/12	内外：ヨコナゲ、ナゲ	密	良	浅黄緑10YR8/3	中北勢
209	001-05	土師器 小皿	58	J8	遺構検出中	口径10.0 高さ2.5	□12/12	外：オサエ、ナゲ 内：ナゲ	密	良	浅黄2.5Y7/4	南伊勢
210	019-06	海部 山茶碗小皿	58	J8	南壁トレンテ	口径8.6 高さ2.3	□7/12 底12/12	外：ロクロナゲ、底部糸切り 内：ロクロナゲ、ナゲ	密	良	灰白2.5Y7/1	尾屋-5 外面底に重ね焼き痕、内面自然蝕
211	007-03	海部 山茶碗小皿	58	J8	遺構検出中	口径8.6 高さ2.5	□7/12 底完存	外：ロクロナゲ、底部糸切り 内：ロクロナゲ	密	良	灰白2.5Y7/1	尾屋-5 込みあり、全体に磨耗
212	001-04	海部 山茶碗小皿	58	J8	遺構検出中	口径8.6～9.0 高さ2.0	ほぼ完存	外：ロクロナゲ、底部糸切り 内：ロクロナゲ	密	良	灰白2.5Y7/1	尾屋-6 込みあり、内面磨付着
213	038-04	海部 山茶碗小皿	58	J8	遺構検出中	口径8.6	□2/12 底12/12	外：ロクロナゲ、底部糸切り 内：ロクロナゲ	密	良	灰白2.5Y7/1	尾屋-6 内口縁部自然蝕
214	002-05	海部 山茶碗小皿	58	J8	遺構検出中	口径8.2 高さ1.8	□9/12 底完存	外：ロクロナゲ、底部糸切り 内：ロクロナゲ、ナゲ	密	良	灰白2.5Y7/1	尾屋-7 or 8 外口～内面自然蝕 底部磨書
215	002-04	海部 山茶碗	58	J7	遺構検出中	口径16.0 高さ5.5	□3/12 底8/12	外：ロクロナゲ、底部糸切り、高台貼付後ナゲ 内：ロクロナゲ	密	良	灰白2.5Y7/1	尾屋-6 外面底面保付着 内面に重ね焼き痕 あり 外口～内面自然蝕
216	022-04	海部 総利	58	J1	遺構検出中	口径4.6	□5/12	内外：ロクロナゲ、廻輪(磨輪)	密	輪	黒褐10YR3/2 断面：灰白10YR8/2	

第19表 遺物観察表7

報告番号	実測番号	種類・部材等	調査次数	小地区	遺構名	計測値(m)	残存度	調整・技法の特徴	助土	構成	色調	特記事項
217	016-04	土師器 鉢	5B	19	楕圓中	小片	—	—		粗良	灰白・黄緑10YR7/3	三河産内耳鉢か
218	016-03	土師器 羽釜	5B	15	楕圓中	小片	—	外：ハケメ、ヨコナゲ、焼成前穿孔 内：ナゲ		密良	灰黄緑10YR8/3	ミコニユア
219	021-03	加工円板	5B	17	楕圓中	—	—	側面打ち欠き		密良	灰黄2.5Y7/2	重さ 50.95g 山茶碗(19号?) 底部加工
220	021-02	加工円板	5B	16	楕圓中	—	—	高台・側面加工		密良	軸：にぶい黄緑 10YR7/4 断面：浅 黄緑10YR8/3	重さ 20.06g 御津崎高台加工
241	041-03	瓦質土師器	5B	11	楕圓中	長6.6 幅4.5 厚1.4	—	スリ痕あり		—	—	重さ 57.68g
222	034-04	須恵系 壺	5A2	13	複扁	高台径10.0	底2/12	外：ナゲ、高台貼付後ナゲ 内：自然釉		密良	底面：黒焼25Y3/1 断面：灰3Y6/1	底、付着物あり
223	039-04	海部 山茶碗	5A1		包含層	高台径7.0	底8/12	外：ロクロナゲ、高台貼付後ナゲ、底部赤 内：ロクロナゲ		密良	灰白5Y7/1	胴裏-5 内面摩耗、軸用硬さ? 外周割れ口と高台に付着物あり (図7)、墨書あり、「龍泉」 「龍雲」(見か?)
224	048-02	軒丸瓦	5A2	13	楕圓中	瓦当	1/4	ナゲ		密良	灰3Y4/1～灰白5Y7/2	
225	015-07	土師器 鉢	5B	18	楕圓中	口径13.0	口4/12	外：オオユ、ヨコナゲ 内：ヨコナゲ		密良	灰黄緑10YR8/3	京都系 口縁埋内外面造付層
226	016-02	海部 山茶碗小皿	5C	16	楕圓小	口径8.0	口2/12 底4/12	外：ロクロナゲ、底部赤切り 内：ロクロナゲ		密良	灰黄2.5Y7/2	尾根-7 or 8
227	025-05	海部 山茶碗	5C	10	楕圓中	高台径6.6	底完存	外：ロクロナゲ、底部赤切り、高台貼付 ナゲ、モミダツ飯 内：ロクロナゲ		密良	灰白5Y7/1	尾根-6
228	014-01	海部 山茶碗	5C	12	楕圓中	口径15.6 高さ5.3	口5/12 底完存	外：ロクロナゲ、底部赤切り、高台貼付 ナゲ、モミダツ飯 内：ロクロナゲ、ナゲ		密良	灰黄2.5Y7/2	尾根-6 墨みあり
229	015-01	海部 山茶碗	5C	11	楕圓中	口径15.0 高さ4.9	口3/12 底完存	外：ロクロナゲ、底部赤切り、高台貼付 ナゲ、高台に砂和痕 内：ロクロナゲ	やや 密	密良	灰黄2.5Y7/2	尾根-6 墨書あり「丹」
230	014-02	海部 山茶碗	5C	12	楕圓中	口径16.3 高さ5.3	口3/12 底完存	外：ロクロナゲ、底部赤切り、高台貼付 ナゲ、モミダツ飯 内：ロクロナゲ		密良	灰黄2.5Y7/2	尾根-6 少し墨みあり、内面窪み自然釉
231	021-04	磁器 青磁碗	5C	10	楕圓中	口径18.0	口1/12	内外：ロクロナゲ、施釉		密良	軸：灰白色 断面： 7.5Y7/1、灰5N/5	龍泉
232	020-04	磁器 青磁碗	5B	17	楕圓小片	底部小片	底6/12	高台削出、施釉		密良	軸：灰白5Y7/2 断面：灰白7.5Y7/1	重さ 55.87g 龍泉
233	022-03	海部 燗鉢	5C	16	楕圓中	底部径16.0	底2/12	外：ロクロナゲ、底部赤切り、施釉(繪釉) 内：ロクロナゲ、スリ目、施釉(繪釉)		密良	軸：褐色5YR4/3 断面：浅黄2.5Y7/3	瀬戸(豊1)
234	017-03	石製品 礎石	5C	12	楕圓中	長8.6 幅3.7 厚3.1	—	物に二面よく使用している		—	—	重さ 104.58g
235	039-05	山茶碗 転形碗	5C	12	楕圓中	長6.5 幅5.4 厚1.4	—	側面、高台一部打ち欠き		—	—	重さ 50.97g 内に墨痕、内面摩耗
236	039-06	山茶碗 転形碗	5C	12	楕圓中	長5.0 幅4.1 厚1.5	—	側面、打ち欠き後研磨		—	—	内面磨耗 重さ 31.43g
237	048-03	軒丸瓦	5C	16	楕圓中	瓦当 完存	—	ナゲ		密良	3N4/	
238	056-02	海部 山茶碗小皿	6YR	6	楕圓中	口径8.2 高さ1.6	口5/12 底6/12	外：ロクロナゲ、底部赤切り 内：ロクロナゲ、ナゲ		密良	灰黄2.5Y7/2	尾根7 or 8
239	054-03	海部 山茶碗	6YR	6	楕圓中	口径14.0	口3/12	外：ロクロナゲ 内：ロクロナゲ		密良	灰黄2.5YR7/2	尾根-6 内面自然釉
240	054-04	土師器 羽釜	6YR	6	楕圓中	口径27.0	口1/12	外：ヨコナゲ、胴部貼付後ナゲ、ハケメ 内：ナゲ、ヘラケズリ		密良	軸7.5YR6/6	中北勢 樽下部底付層
241	038-01	土師器 小皿	5B		表土 粗粒	口径7.4	口3/12	内外：ナゲ、ヨコナゲ		密良	にぶい黄緑7.5YR7/3	中北勢
242	001-01	海部 山茶碗	5B		表土 粗粒	高台径7.0	底 12/12	外：ロクロナゲ、底部赤切り、高台貼付 ナゲ、モミダツ飯 内：ロクロナゲ		密良	灰白2.5Y7/1 軸： 灰白5Y7/2	尾根-5 内面自然釉
243	001-02	海部 山茶碗	5B		表土 粗粒	高台径6.2	底 12/12	外：ロクロナゲ、底部赤切り、高台貼付 ナゲ、モミダツ飯 内：ロクロナゲ		密良	灰白2.5Y7/1	尾根-6 底部墨書あり
244	001-03	土師器 羽釜	5B		表土 粗粒	口径23.0	口1/12	外：胴貼付後ナゲ、ハケメ、口縁埋部ヨコ ナゲ 内：ナゲ、ヨコナゲ		密良	にぶい黄緑10YR7/3	中北勢 外面窪み底付層のため、ハケメ不明
245	047-02	金属製品 鉢	5B		表土 粗粒	長6.4 幅1.3 厚1.3	—	—			—	重さ 14.58g
246	036-02	海部 山茶碗	5YR		表土 粗粒	高台径6.0	底6/12	外：ロクロナゲ、底部赤切り、高台貼付 ナゲ、モミダツ飯 内：ロクロナゲ、ナゲ		粗良	灰黄2.5Y7/2	尾根-6 内面自然釉
247	036-03	海部 山茶碗	5YR		表土 粗粒	高台径6.0	底6/12	外：ロクロナゲ、底部赤切り、高台貼付 ナゲ 内：ロクロナゲ、ナゲ		密良	灰黄2.5Y7/3	尾根-6 高台多くを欠損
248	025-03	海部 山茶碗	5C	12	表土 粗粒	高台径7.0	底4/12	外：ロクロナゲ、高台貼付後ナゲ 内：ロクロナゲ、ナゲ		密良	灰黄2.5YR6/2	尾根-6
249	029-03	海部 灯明台	5C		腐土	口径7.1 高さ4.5	口6/12 底完存	外：ロクロナゲ、ロクロナゲズリ、施釉 内：ロクロナゲ、ロクロナゲズリ、上部施釉		密良	灰黄黒10YR6/2	信濃 底部付着物有

第20表 遺物観察表8

第6章 自然科学分析

第1節 鍛冶滓の金属学的調査

1 経緯

小野城跡は三重県亀山市小野町に所在する。第5次調査地区では、鎌倉時代から室町時代の掘立柱建物、道路跡などの遺構群が検出された。また13世紀中頃～14世紀前半と推定される土坑（SK5049）の覆土中より鍛冶滓が出土している。この鍛冶滓がどのような作業に伴う遺物が詳しく検討するため、金属学的調査を行う運びとなった。

2 調査方法

2-1. 供試材：第21表に示す。

2-2. 調査項目

(1) 肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

鉱滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μ と1 μ で鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。金属鉄の調査では3%ナイトル（硝酸アルコール液）を腐食（Etching）に用いた。

(4) ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鉱滓中の品出物の判定を行った。

また金属鉄の硬さ測定も同様に実施した。試験は

鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡を用い、荷重は50～100gfで測定した。

(5) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。

また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

(6) 化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO₂）、酸化アルミニウム（Al₂O₃）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K₂O）、酸化ナトリウム（Na₂O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO₂）、酸化クロム（Cr₂O₃）、五酸化磷（P₂O₅）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO₂）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

3 調査結果

ONO-1：梶形鍛冶滓

(1) 肉眼観察 49gと小型の梶形鍛冶滓の破片

である。色調は暗灰色で、上面と側面2面は破面である。残る側面1面と下面は試料本来の表面で、細かい木炭痕による凹凸が著しい。破面には細かい気孔が多数散在するが、緻密である。

(2) マクロ組織 第61図①に示す。洋中(灰色部)に、不定形の微細な鈍化鉄(明灰色部)が多数散在する。

(3) 顕微鏡組織 第61図②~④に示す。②の青灰色部は鈍化鉄である。部分的に金属組織の痕跡が残存している。③④はその拡大で、針状フェライト(Ferrite: α 鉄) および黒色層状のパーライト(Pearlite) 組織の痕跡が確認された。この組織痕跡から、炭素(C)含有量が0.1%前後の軟鉄と推定される。

また洋中には、白色粒状結晶ウスタイト(Wustite: FeO)、淡灰色柱状結晶ファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) が晶出する。鍛錬鍛冶洋の晶癖である。

(4) ビッカース断面硬度 紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、白色粒状結晶の硬度を測定した(荷重: 50gf)。硬度値は422HVであった。風化の影響か、ウスタイトの文献硬度値450~500HVよりやや軟質の値を示す。しかし後述のEPMA調査結果からウスタイトに同定される。

(5) EPMA調査 第61図⑤に洋部の反射電子像(COMP)を示す。白色粒状結晶は特性X線像をみると鉄(Fe)、酸素(O)に反応があり、24の定量分析値は102.9%FeOであった。ウスタイト(Wustite: FeO)に同定される。また淡灰色柱状結晶は、特性X線像では鉄(Fe)、珪素(Si)、酸素(O)に反応がみられる。定量分析値は25.6%FeO-1.7%MgO-31.5%SiO₂、26は60.7%FeO-1.3%MgO-32.2%SiO₂であった。ファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)に同定される。27の素地部分の定量分析値は66.7%SiO₂-11.0%Al₂O₃-3.2%FeOであった。非晶質珪酸塩系で鉄分(FeO)を微量含む。

さらに36の明白色粒は、特性X線像では鉄(Fe)に強い反応がみられる。定量分析値は105.9%Feであった。金属鉄(Metallic Fe)である。

(6) 化学組成分析 第22表に示す。

全鉄分(Total Fe) 55.97%に対して、金属鉄(Metallic Fe) 0.19%、酸化第1鉄(FeO) 47.42%、

酸化第2鉄(Fe₂O₃) 27.05%の割合であった。造洋成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) 18.92%であるが、塩基性成分(CaO+MgO)は1.10%と低値であった。製鉄原料の砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)は0.19%、バナジウム(V) 0.01%、酸化マンガン(MnO)も0.04%と低い。銅(Cu)も<0.01%と低値である。

当資料は砂鉄起源の原石成分(TiO₂、V、MnO)の低減傾向が著しく、鉄素材が加熱されて生じた酸化鉄(FeO)と、材材または鍛接剤(粘土汁、薬灰)起源の造洋成分(特にSiO₂、Al₂O₃)が主成分であった。この特徴から、鉄器を熱間で鍛打加工した時に生じた鍛錬鍛冶洋と推定される。

ONO-2: 鍛冶洋

(1) 肉眼観察 2.0g弱とごく小型の鍛冶洋である。色調は暗灰色で、表面は微細な木炭痕による凹凸が著しい。明瞭な破面はなく、粉炭の隙間で生じたものと判断される。また気孔は少なく、軽い質感の洋である。

(2) マクロ組織 第62図①に示す。まとまった金属鉄(ないしは鈍化物)のほとんどない、鍛冶洋破片であった。

(3) 顕微鏡組織 第62図②③に示す。洋中には白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファイヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶洋の晶癖である。

(4) ビッカース断面硬度 紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、白色粒状結晶の硬度を測定した(荷重: 50gf)。硬度値は461HV、470HVであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ウスタイトに同定される。

さらに淡灰色柱状結晶の硬度測定も実施した(荷重: 100gf)。硬度値は639HV、685HVであった。ファイヤライトの文献硬度値600~700HVの範囲内であり、ファイヤライトに同定される。

(4) EPMA調査 第62図④に洋部の反射電子像(COMP)を示す。28の素地部分は、特性X線像をみると珪素(Si)、アルミニウム(Al)、カルシウム(Ca)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は47.4%SiO₂-21.2%Al₂O₃-5.7%CaO-10.0%K₂O-3.1%Na₂O-15.3%FeOであった。非晶質珪酸塩系で鉄分(FeO)をかなり含む。

29の淡灰色柱状結晶は、特性X線像では鉄（Fe）、珪素（Si）、酸素（O）に反応がみられる。定量分析値は69.0%FeO-2.0%CaO-1.6%MgO-31.1%SiO₂であった。ファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO₂）に同定される。また白色粒状結晶は特性X線像をみると鉄（Fe）、酸素（O）に反応があり、30の定量分析値は100.7%FeOであった。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。

さらに37の明白色粒は、特性X線像では鉄（Fe）に強い反応がみられる。定量分析値は104.8%Feであった。金属鉄（Metallic Fe）である。

以上の調査結果のように、当資料は椀形鍛冶滓（ONO-1）と酷似した鉱物組成が確認された。同様に鉄器を熱間で鍛打加工した時に生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。

4 まとめ

小野城跡から出土した鍛冶滓2点は、いずれも純度の高い（製錬工程起源の不純物をほとんど含まない）鉄素材を赤熱状態に加熱して、鍛打加工した時に生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。ある程度精製された鉄素材（または廢鉄器）を原料として、鍛造鉄器を製作していた可能性が高いと考えられる。

（九州テクノリサーチ・TACセンター

大澤正己・鈴木瑞穂）

註

- 1 日刊工業新聞社『地結晶組織写真および識別法』1968
ウスタイトは450～500HV、マグネタイトは500～600HV、
ファイヤライトは600～700HVの範囲が提示されている。

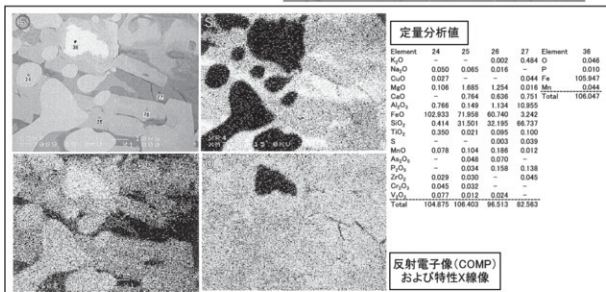
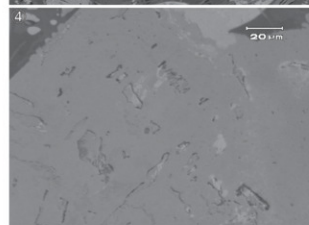
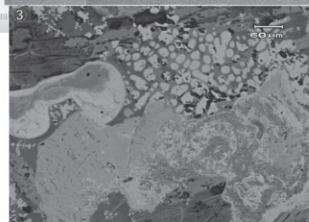
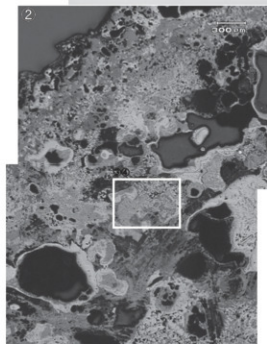
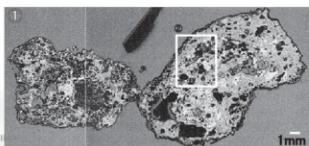
符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル像	調査項目					備考		
					大きさ(mm)	重量(g)		マイクロ組織	磁気組織	電子線分析	EDS分析	EPMA		化学分析	耐火度(30分)
ONO-1	小野城跡	SK048	椀形鍛冶滓片	13c中頃	40×25×28	49.06	なし	○	○	○		○			
ONO-2			鍛冶滓	～14c前半	18×15×8	1.71	なし	○	○	○		○			

第21表 供試材の履歴と調査項目

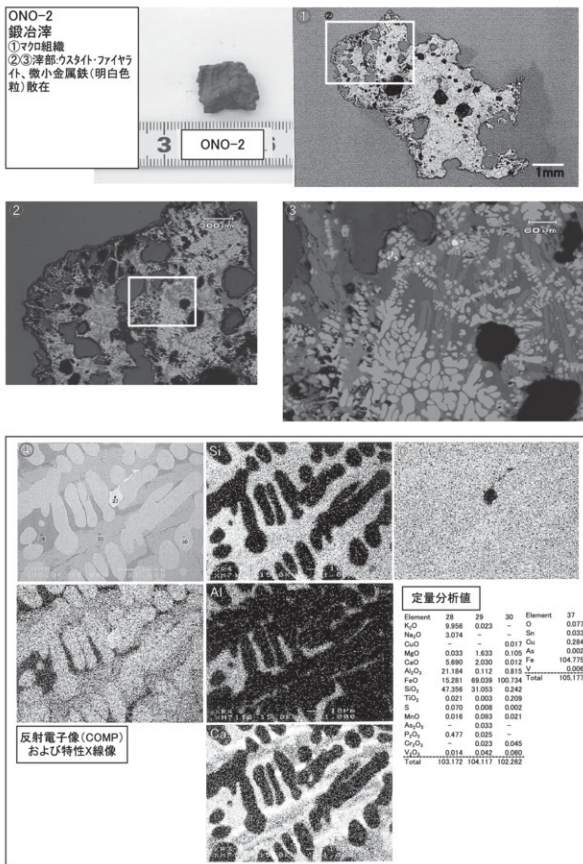
符号	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化 第1鉄 FeO	酸化 第2鉄 Fe ₂ O ₃	酸化 珪素 SiO ₂	酸化 アルミ ン Al ₂ O ₃	酸化 カルシ ウム (CaO)	酸化 マグネ シウム (MgO)	酸化 ナトリ ウム (Na ₂ O)	酸化 マンガ ン (MnO)	酸化 チタン (TiO ₂)	酸化 コバル ト (Co ₂ O ₃)	硫黄 (S)	三酸化 リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	水素 (H)	酸素 (O)	二酸化 シリカ (SiO ₂)	二酸化 チタン (TiO ₂)	二酸化 マンガン (MnO)	二酸化 鉄 (FeO)	金属成分 Total Fe	金属成分 Total Fe	TiO ₂	
ONO-1	55.97	0.19	47.42	27.05	13.86	3.00	0.72	0.38	0.72	0.24	0.04	0.19	0.04	0.054	0.15	0.16	0.01	<0.01	<0.01	18.82	0.338	0.003			

第22表 供試材の化学組成

ONO-1
 梘形鐵冶滓
 ①マクロ組織
 ②滓部・ウスタイト・ファイヤイト
 ③④錆化鉄部多数散在
 ⑤共析組織痕跡残存



第61図 梘形鐵冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果



第62図 鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

第2節 金属製品の分析

1 分析対象

小野城跡（第5次）出土金属製品（預2008-1160 No. 1とNo. 2）

2 使用機器及び原理

・エネルギー分散型蛍光X線分析装置（XRF）（SHI ナノテクノロジー社製SEA5230）

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。

接合部分等の狭い箇所とその比較測定を行うため、励起電圧50kV、コリメータ径φ0.1mm、大気圧下で300秒間X線を照射し、測定した。

なお、X線管球はモリブデン（Mo）である。

・全反射フーリエ変換赤外分光光度計（ATR-FTIR）（SensIR Technologies製Travel IR）

赤外線を試料に照射することにより得られる、分子の構造に応じた固有の周波数吸収を解析し、化合物の種類を同定する。

分解能4cm⁻¹、検出器TGSで測定した。

・マイクロスコープ（株式会社キーエンス製VHX-200）

3 分析内容

No. 1 煙管の接合部分に検出される元素をXRFにより分析した（第63～66図）。煙管本体の材質との比較により、接合部分に用いられた銅の材質を考察した。

No. 2 青銅小皿について、金属光沢部分と接合部分に検出される元素をXRFにより分析した（第70～72図）。小皿本体の材質との比較により、光沢部分や接合部分に用いられた材質を考察した。また、黒色付着物の分析を行うため、資料より微量採取した（第76～78図）。採取片はXRFとATR-FTIRにより分析した。さらに、採取片からアセトンにより有機成分を抽出し、抽出成分をATR-FTIRにより分析した。

4 結果

No. 1 煙管の接合部分1、2と本体において、鉄（Fe）・銅（Cu）・亜鉛（Zn）・スズ（Sn）・鉛（Pb）が検出された（第67～69図）。検出強度を接合部分1、2と本体と比較すると、接合部分1、2でスズ

が強く検出された（第23表）。

No. 2 青銅小皿の金属光沢部分、接合部分と本体において、鉄・銅・ヒ素（As）・銀（Ag）・スズ・鉛が検出された（第73～75図）。検出強度を金属光沢部分や接合部分と本体で比較すると、金属光沢部分で銀が強く検出され、接合部分で銅が同程度で、鉄とスズ、鉛が強く、ヒ素が弱く検出された（第24表）。

採取した黒色付着物のXRF結果において、鉄と銅を検出した（第79図、第25表）。また、黒色付着物のATR-FTIR結果では1005cm⁻¹付近にピークが観測され、アセトン抽出のATR-FTIR結果では2920、2900、1740～1690、1660～1645、1560～1515、1460、1370、1230、1100cm⁻¹付近にピークが観測された（第80・81図）。

5 考察

No. 1 煙管のXRF結果により、本体の材質は真鍮（黄銅）製であることが分かった。鉄は、土壌成分由来と考えられる。鉛は、真鍮の微量成分由来と考えられる。接合部分で銅・亜鉛と共にスズが強く検出されたことから、スズを含んだ真鍮銅で接合されたと考えられる。なお、浄土近世墓地出土煙管（契約番号2005-0103、預2004-0880 No. 6、17、18、19、20、38、39、46、47、53、60、76、77、90、113、114、115）や中林・中道遺跡（C地区）（契約番号2008-0055、預2008-0360 No. 7、12）の接合部分においても、スズ（と鉛）を含む真鍮銅が確認されている。

No. 2 青銅小皿XRF結果より、材質が銅・スズ・鉛からなる青銅製であることが分かった。鉄・ヒ素は、土壌成分由来が銅の微量成分由来と考えられる。金属光沢部分で銀が強く検出されたことから、鍍銀か銀箔が施されていた可能性が考えられる。接合部分で銅は変わらず、スズや鉛が強く検出されていることから、スズや鉛を加えた銅合金で接合された可能性が考えられる。

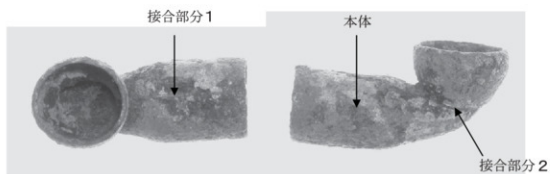
No. 2で採取した黒色付着物は、XRFにより小皿由来の銅を強く検出すると共に鉄を検出した。黒色付着物のATR-FTIR結果は銅錯のピークが強く検出され

るのみで、タンニン酸第二鉄¹のピークは検出できなかった。一方アセトン抽出した試料のATR-FTIR結果は、有機物に特徴的な2920、2900cm⁻¹付近のピークを検出した。顕微鏡観察では、黒色付着物は塗膜状でなく粉末が固化した形状を示し、多くの夾雑物が観察された（拡大図3b）。XRF（鉄）とATR-FTIR（有機物）結果および顕微鏡観察（形状や夾雑物）から黒色付着物はお歯黒と考えられたが、銅錆等の影響が大ききお歯黒（タンニン酸第二鉄）と断定できる結果を得られなかった。

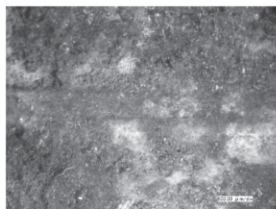
（財団法人 元興寺文化財研究所 山田卓司）

註

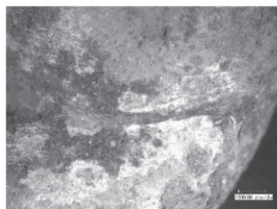
- 1 お歯黒（鉄漿）の材料は、「ふしのこ」と「鉄漿水」である。「鉄漿水」は水、酒、酢、茶などの混合液に古鉄片を入れて作ったもので、主成分は酢酸第一鉄である。「ふしのこ」はウルシ科ヌルデにできる病瘤を粉末としたもので、主成分はタンニンである。使用時には、「ふしのこ」と「鉄漿水」を交互に混ぜながら歯の表面に塗っていく。酢酸第一鉄が酸化されて生成した酸化第二鉄とタンニンとが反応し、黒色不溶性のタンニン酸第二鉄として歯の表面に黒色の皮膜をつくる。（伊藤俊太郎、坂本賢三、山田慶児、村上陽一郎編、『科学史技術史辞典』、弘文堂、p.143）
タンニン酸第二鉄のIR結果：3400（幅広い）、1715、1670、1590、1480、1330、1200、1080cm⁻¹付近にピークをもつ。



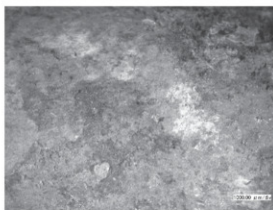
第 63 図 煙管の測定箇所



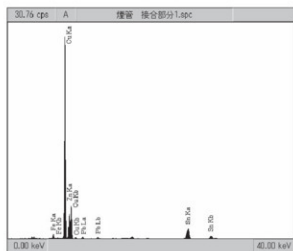
第 64 図 煙管接合部分 1 拡大図



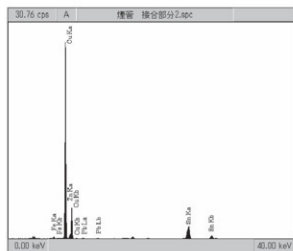
第 65 図 煙管接合部分 2 拡大図



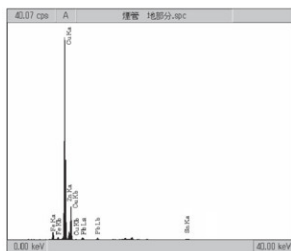
第 66 図 煙管本体部分 拡大図



第 67 図 煙管接合部分 1 の XRF 測定結果



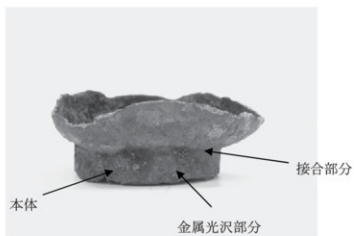
第 68 図 煙管接合部分 2 の XRF 測定結果



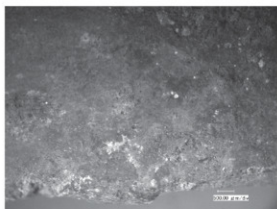
第 69 図 煙管本体の XRF 測定結果

Z	元素	元素名	ライン	a. 接合 1(cps)	b. 接合 2(cps)	c. 本体(cps)	ROI (keV)
26	Fe	鉄	K α	5.687	3.074	19.259	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	249.182	242.850	327.986	7.86- 8.22
30	Zn	亜鉛	K α	37.434	11.141	20.583	8.45- 8.82
50	Sn	スズ	K α	26.553	32.340	2.165	24.92-25.47
82	Pb	鉛	L β	2.151	0.949	2.569	12.42-12.84

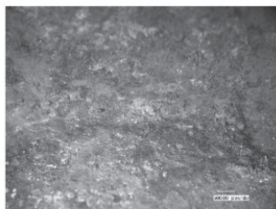
第 23 表 煙管の XRF 測定結果まとめ



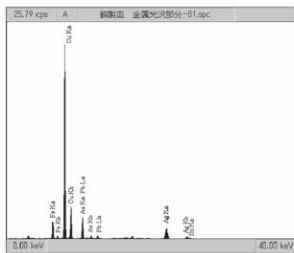
第70図 青銅小皿の測定箇所



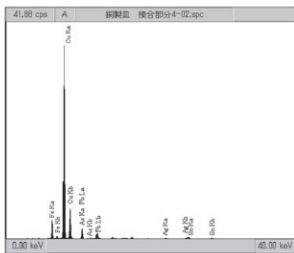
第71図 青銅小皿金属光沢部分 拡大図



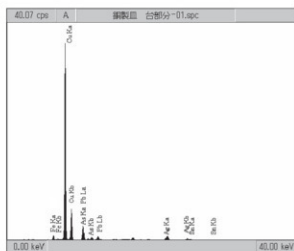
第72図 青銅小皿接合部分 拡大図



第73図 青銅小皿金属光沢部分のXRF測定結果



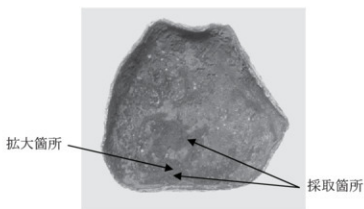
第74図 青銅小皿接合部分のXRF測定結果



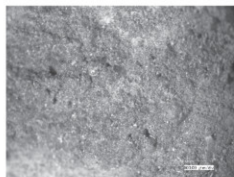
第 75 図 青銅小皿金属本体の XRF 測定結果

Z	元素	元素名	ライン	a. 光沢(cps)	b. 接合(cps)	c. 本体(cps)	ROI (keV)
26	Fe	鉄	K α	16,580	31,092	6,249	6.23-6.57
29	Cu	銅	K α	200,512	325,959	319,658	7.96-8.22
33	As	ヒ素	K β	4,302	1,604	4,025	11.52-11.93
47	Ag	銀	K α	20,676	2,190	9,613	21.84-22.36
50	Sn	スズ	K α	3,044	5,568	2,445	24.92-25.47
82	Pb	鉛	L β	4,567	15,388	6,546	12.42-12.84

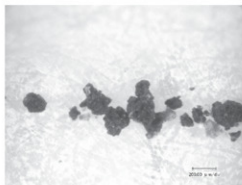
第 24 表 青銅小皿の XRF 測定結果



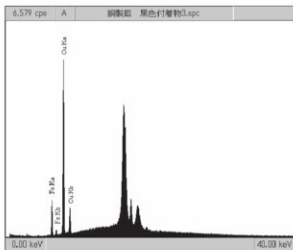
第 76 図 青銅小皿の黒色付着物採取箇所



第 77 図 青銅小皿黒色部分 拡大図



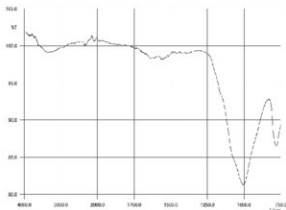
第 78 図 採取した黒色付着物 拡大図



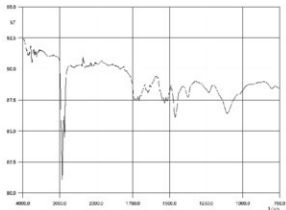
第 79 図 黒色付着物の XRF 測定結果

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI (keV)
26	Fe	鉄	K α	9.229	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	48.054	7.86- 8.22

第 25 表 黒色付着物の XRF 測定結果



第 80 図 黒色付着物の ATR-FTIR 測定結果



第 81 図 黒色付着物アセトン抽出の ATR-FTIR 測定結果

第7章 結 語

第1節 縄文から古墳時代前期の状況

今回の調査では、縄文・弥生土器、古式土師器が出土しているが、いずれも遺構に伴うものではない。出土地点は、特にまとまった様子はないが、第5次B・C地区から多く出土している（第27表）。これは、削平が少なく、黒ボクが多く残存していたことによるものと思われる。

最も古い遺物は、縄文時代早期の押型文土器であ

る。小野城跡の東方約2kmには、縄文時代早期前半の大鼻式の指標遺跡である大鼻遺跡がある。小野城跡周辺でも当時生活が営まれていた可能性がある。大鼻遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓なども見つかり、遺構は確認できなかったものの小野城跡の立地する丘陵上でも当該期に生活が営まれていたと考えられる。

第2節 古代の状況

古代の小野城跡周辺には、鈴鹿関や東海道と関連する遺構が存在する可能性がある。今回の調査では、それらと直接関連付けられるようなものは確認できなかったが、堅穴住居（SH5074）を1棟検出した。今回の調査では、古代の遺物が出土したのはSH5074にほぼ限られ、他の遺構は確認できなかった。

1 土管状土製品について

小野城跡で出土した土管状土製品は、4個体が横倒しとなり、底部と口縁部を合わせる形で出土している。堅穴住居と考えられるSH5074の中央から東辺中央部を通過して外に向かう状況で出土している。煙道の可能性が考えられるが、中央部から始まっているため、やや疑問が残る。堅穴住居内に並んでいることから、あるいは朝鮮半島などで見られる暖房施設であるオンドルのような役割を果たしていた可能性もあるが、明らかにはできなかった。SH5074は黒ボク土上面から掘られている遺構であるが、上面で掘形を検出できなかったこと、表土掘削時にすでに土管状土製品上面が見つまっていること、後世のSD5044により削平されていること、などにより、本来は2棟以上の堅穴住居があった可能性がある。

土器を煙道として利用している例には、桑名市天

王平遺跡SB94¹・亀山市網中遺跡²・津市雲出島貫遺跡SH374³・同市松山遺跡⁴・伊賀市歌野遺跡SB21⁵などがあるが、いずれも長胴甕の底部を打ち欠き、煙道に再利用しているものである。小野城跡の土管状土製品は当初から底が無い土器として作られている。甕の可能性もあるが、このような形の甕は確認できず、土管状土製品とした。

土管状土製品に似た形状のものとして「筒形土器」と呼ばれるものがあり、小山憲一氏による集成がある⁶。しかし、筒形土器は口縁部が広がらずに直立する、あるいは内弯気味となるものがほとんどであり、口縁部が開くものは4例に過ぎず、形状もやや異なる。使用例が明確なものも少なく、畜宮跡（第30次）SB1615で、倒立状態で用い、カマドの支柱として使用した例⁷があるのみである。

筒形土器については、「円筒形土製品」として、徳網克己氏の研究がある⁸。しかし、この中にも小野城跡と同様の形態のものは見られない。

類例を探し出すことができなかったため、時期決定には若干疑問が残るが、長胴甕として捉えれば、口縁部の形態などからおよそ8世紀代、奈良時代の遺物として大過ないものと考えられる。

第3節 中世の小野城跡について

今回の調査では、12世紀後葉から16世紀にかけての遺構・遺物が多数確認された。検出された主な遺構には、東西方向に走る道路状遺構（SR4018）と

それに直行する南北方向の道路状遺構、及び区画溝と考えられる溝により囲まれた屋敷地がある。屋敷地からは、掘立柱建物や土坑などが検出された。

しかしながら、第4章で述べたとおり、遺構は丘陵上に立地していることもあってか、道路状遺構や区画溝、大型の土坑などは中世段階で埋没してないものがあり、埋土の上層が耕作土と区別がつかない遺構が多く存在している。本来ならば、近世以降の土を除去した上で調査を行うべきであったが、そのような調査を行うことはできなかった。そのため、遺構の大半は混入遺物を含め中世前期から後期の遺物を含むこととなり、埋土上層が耕作土であることもあって切り合いなども明らかにできていないものが多い。各遺構の時期的な検討は最小限にとどめ、区画毎の検討を加えることとする。

1 道路状遺構について

道路状遺構は、いずれも溝状に浅く掘り窪めた後、側溝や硬化面を敷設して造られたものである。全体でこのような状況は見られたわけではなく、部分的にこのような作業が行われている。

砂礫が敷かれたと考えられる痕跡は、SR4018の第4次調査では部分的に見られ、第5次調査A1地区の斜面部(SR5010)でも検出された。他の道路状遺構では、第6次調査の東西道路SR6012、南北道路のSR5154、SR6006で確認された。硬化面が検出されなかった場所は、流失した部分もあるだろうが、地山が砂礫層になるまで掘削されて非常に硬くなっており、砂礫を敷く必要が無かったものと思われる。地山が軟弱な部分に砂礫を敷いて、路面を強化したのであろう。SR6012では、途中まで砂礫が敷かれ、途中から砂礫が敷かず地山の砂礫層になっていることが確認された。

道路状遺構で特徴的に見られる波板状凹凸遺構は、2箇所を確認できた。そのうちSR5154では、溝状遺構掘削後硬化面が敷かれ、硬化面を切る形で波板状凹凸遺構が検出された。SR5154の基盤は軟弱な粘質土であり、硬化面敷設後、道路の使用の際に波板状の圧痕が形成されたのではないかと想定される。

C地区では、側溝と思われる2条の溝が平行する道路状遺構が検出されたが、本来は他の地区で検出された状況と同じく、全体を溝状に掘り下げ、両側に側溝を設けた道路状遺構であったと思われる。その理由は、道路北側が他の検出面よりも0.2~0.3m程度高く、この地点で黒ボクが見られたからである。

本来はこの高さであった地形が後の耕作などにより削平された結果、溝状に掘り下げた部分が不明となり、側溝のみが残ったものと思われる。

2 区画から見た遺構の状況

調査区内は、第4章で述べたとおり溝・道路状遺構により9箇所区画が確認できた。区画毎に特徴を述べる。区画名は第4章のとおりである。

区画1 区画溝が見られず、明確な区画は不明である。掘立柱建物3棟を検出した。

区画2 調査時は掘乱溝と考えていたが、西側の溝が検出され、溝が屈曲し掘立柱建物を囲むことから、区画溝とした。東西約50mである。掘立柱建物4棟や土坑が検出されている。

区画3 東西約33mの区画地である。西側は調査区北の土塁の延長とほぼ一致することから、本来は西側に土塁を伴っていた可能性があるが、痕跡は確認できなかった。掘立柱建物2棟のほか、土坑が多数見つっている。少量ではあるが、鉄屑も見つっており、区画地内で鍛冶を行っていた可能性がある。遺物・遺構とも最も多く見つっており、今回の調査地内では中心となる区画である。

区画4 区画2・3の北側に位置する区画地である。西溝SD5051のみの確認であるが、この溝は断面V字に掘削され、一時期に埋め戻されたことが確認できる溝である。道路建設時または修復の際に埋め戻されたのではないかと推測できる。北側の墓地を取り囲む土塁と位置・方向が一致するが、この土塁は後世のものである可能性が高く、関係は不明である。

区画5 東西約33mの区画地である。現道のため不明であるが、東端で溝と思われる落ち込みが確認でき、これを東溝とした。区画Cとの間は約10m離れる。この空間は土塁、道路などが考えられる。西側は道路状遺構の可能性のある浅い溝状の落ち込みSD5117である。掘立柱建物4棟を確認した。

区画6 東西約50mの区画地である。西を区画する遺構として道路状遺構SR5154が考えられるが、SR5154を切る溝SD5150も確認されている。掘立柱建物は確認できていないが、柱穴は多数見つっており、掘立柱建物は存在したと思われる。

区画7 東西約55mの区画地である。明瞭な遺構は見られない。後世の畑の痕跡が多く見られ、柱穴状

の遺構もそれに切られる形でいくつか見られるが、掘立柱建物と確認できなかった。

区画 8 東西約40mの区画である。西側はL字に曲がる溝SD6011により区画される。明瞭な遺構はない。

区画 9 現道にはさまれた狭い区画であり、区画規模は不明である。掘立柱建物が1棟確認できた。

今回の調査で検出された区画溝は、それ自体が空間を遮断するような機能を持つと考えられるようなものは少なく、大半は底が平らで幅広く、深さもあまりないものであった。おそらくは、硬化面や板状凹凸遺構の確認できなかったものの道路として利用されていたと考えられ、道路によって区画された集落であると考えたほうがよいのかもしれない。明確に、遮断を意識したと考えられる溝は、区画4西溝のSD5051くらいである。

北側は道路状遺構で区画されると想定される。南北規模は調査区外にのびるため不明である。

3 道路状遺構と区画との関係

調査区内は削平が進んでおり、遺構の埋没時期が新しいと考えられることから、両者の時期を考えるのは困難であるが、切り合い関係の明らかとなった箇所について若干述べておく。

両者の切り合い関係が明らかとなったのは、第5次調査B地区である。SD5051は断面V字形で、このような形状の溝は調査区内では確認されていない。またこの溝は、土層断面から人為的に埋められた溝であり、そのような溝も調査区内では確認できていない。この溝は道路状遺構SD5032に切られており、道路状遺構敷設時に埋められたものと考えられる。

ここで問題となるのが、区画溝との間わりである。SD5051はSD5032の下層で検出されたSD5057と接続すると考えられ、区画溝も道路状遺構以降に設置された可能性が高いこととなる。しかしながら、SD5051で見られた人為的に埋められた痕跡はSD5057では確認できず、上層には耕作土と思われる堆積が見られる。さらに東に進むと第4次調査では覆土溝と考えられていたように、埋土の大半が耕作土となっている。おそらくは、耕地化するまで利用・放置されていたと思われる。道路状遺構は近世まで道路として利用されていたと考えられることから、

最終的な埋没は区画溝より新しいものの、区画溝が利用されていた時期も道路状遺構として存在していたと考えられる。その際、ある時期にSD5051は区画としての意味を失って人為的に埋められ、その部分も道路状遺構として利用されたのであろう。

他に道路状遺構と溝に切り合いが見られるところは、SR5154とSD5150がある。SR5154は板状凹凸遺構、硬化面が確認されており、南へ行くための道路であったと考えられる。SD5150はSR5154を切っており、新しい遺構である。SD5150は道路状遺構の側溝と考えられるSD5138に切られている。しかし、SD5138は途中から現れる溝であり、新たに造り替えられた側溝である可能性がある。SD5138の北側にはSD5135があり、これもSD5138に切られていることから、SD5135とSD5150が同じ溝である可能性が考えられる。とすれば、SR5154はSD5135を側溝とする道路状遺構より古いものと考えられ、SR5154→SD5150とSD5135を区画溝とする区画の成立→道路状遺構拡張（近世?）の可能性が考えられる。

4 掘立柱建物について

掘立柱建物は14棟確認した。掘とされたもの遺構も調査区端で見つかったっており、掘立柱建物の可能性もある。調査区内では他にも多数のPitが検出されており、より多くの建物が存在したと思われる。

山茶碗第5・6型式の遺物が出土している掘立柱建物には、SB4002・5081・5083・5084がある。これらはいずれも総柱の掘立柱建物になる可能性がある。それ以外には、第7型式の山茶碗が出土しているSB4025、山茶碗第8・9型式、古瀬戸後II期、南伊勢系土師器皿などが出土しているSB4001・5153・6028があり、3時期に分けられる。

掘立柱建物の方は、大半がN20°E前後の方向を示し、それ以外にはN28°EのSB4002、N2～5°EのSB4023・5154、大きく東に偏るSB4027がある。出土遺物からは、山茶碗第5型式が出土しているSB4002に対し、それ以外の時期が推定できる掘立柱建物はいずれもN20°E前後であることから、時代の経過によりN20°Eに変化していく可能性がある。しかしながら明確な時期を示すことができる掘立柱建物が少なく、断定はできない。発掘調

査で検出された区画溝もほぼこの方向を示しているほか、調査区南に残存する土塁、現状の畑の区画もほぼ方向を一致しており、現在まで続く調査区周辺の土地区画に一致している。

また、N2～5°EのSB4023・5154については、東西方向の道路状遺構に規制されている可能性がある。ともに、道路状遺構に比較的隣接して立てられており、区画とは無関係の時期の建物であるかもしれない。SB4023で山茶碗の小破片が出土しているが明確な時期は不明である。

3棟の孤立柱建物で、建物内土坑と考えられる土坑を確認した。このうちSB5084の建物内土坑には、炭化材が投棄された状態で見つかったSK5046や、鹿角鍛冶遺構の痕跡と思われる粘土塊や焼石が見ついているSK5063がある。

5 出土遺物について

出土遺物については、当遺跡での出土遺物を示すために、カウントを行った。いずれも器種・時期の判別できるものを対象としている。なお、遺物の福年鑑は、第5章と同様である。

山茶碗については、藤沢良祐氏に全点実見していただいた。型式が明らかになった山茶碗について、その破片数及び底部を12分割した内のどの程度残存しているか、その分子数をカウントしている（底部残存率）。型式の特定できたものは確定とし、複数型式にわたるものは確定数から等分して案分としている（第82・83図）。グラフは、点数では第6型式が突出するため、百分率で示している。

山茶碗は第3型式から出土しており、第5型式に増え始め、第6型式にピークを迎える。第8・9型式は少ないが、第10型式には再び増加し、少数ながら第11・12型式も出土している。

第84～86図は、尾張型と渥美型の出土量（底部残存率）をグラフにしている。渥美型の山茶碗は第5・6型式のものが出土するものの、少数である。

常滑産陶器類などは、中野晴久氏に全点実見していただいた。陶器類の大半は体部の破片であることから、すべて破片数でカウントした。常滑産が主体を占め、信楽産、渥美産が見られる（第93図）。

口縁部が残存するなど型式を確定できたものは少ない。型式毎の出土量を示したのが第87図であり、

型式は明らかではないもののおよその時期が確定できたものを第88図で示した。

壺甕類は常滑産7割、信楽産3割出土している（第92図）。他の遺跡との対比はしていないが、信楽の比率が高いと考えられる。12・13世紀には渥美産が出土している。第89図は常滑甕の時期を示したもので、12世紀代から遺物が出土し、15世紀、15～16世紀の出土量が多い。

陶器鉢では、瀬戸美濃産挿鉢が2点あるがいずれも近世登窯のもので、古瀬戸・大窯とも出土していない。大半は常滑産であり、わずかに信楽産が伊賀産と思われる軟質の鉢が出土している（第91図）。

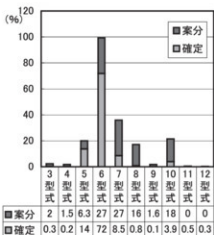
実見していただいた結果、尾張型の山茶碗片口鉢が知多産と考えられることから、第90図で尾張型山茶碗片口鉢と常滑産片口鉢の型式別破片数を示した。型式は中野氏による。6・7型式の出土が見られないが、5型式（藤澤第6型式に相当）に山茶碗同様ピークがあり、その後再び10型式をピークとして8～12型式（16世紀後半）まで出土している。

瀬戸美濃産陶器類は、大半が小破片のため、破片数でカウントした（第94図）。すべて藤沢良祐氏に実見していただいた。古瀬戸後IV古段階が多く、大窯製品は第2段階の皿が2点出土しているのみである。器種では碗類（平碗）の出土が多い（第95図）。

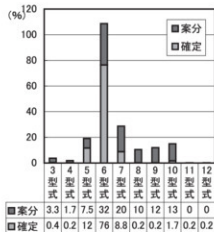
土師器についても小破片の出土が多く、器種が不明なものが多い。土師器皿・小皿は、時期幅があるため問題はあるが、市場遺跡の分類を参考とし、中北勢系、南伊勢系、京都系と分類した。大まかな基準は以下の通りである。

中北勢系：中北勢で多く出土するもので、厚手の器壁のもの。市場遺跡の皿・小皿A・Bに相当する。南伊勢系：南伊勢系土師器に属するもの。伊藤裕偉氏分類によるB系統（市場遺跡皿C）・D系統が見られる¹⁷⁾。

京都系：内外面にヨコナゲを丁寧に施し、口縁部が直線的に開くもの。市場遺跡皿・小皿Dに相当する。器壁がやや厚く在地産の可能性のあるものもあるが、ここに含めた。なお、京都系の小皿でよく見られる「て」の字口縁のものや、「へそ皿」と呼ばれる形態のものは1点も出土していない。時期的な要素を考慮していないため、〇〇系とするのに問題はあるが、

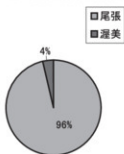


第82図 山茶碗 型式別 (底部残存率・%)



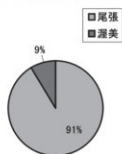
第83図 山茶碗 型式別 (破片数・%)

第5型式底部残存率(案分含)



第84図 第5型式尾張・渥美比率

第6型式底部残存率(案分含)

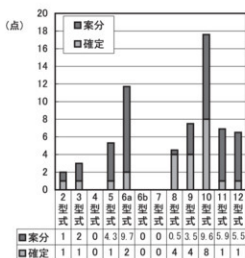


第85図 第6型式尾張・渥美比率

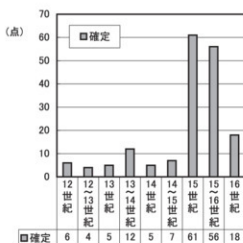
底部残存率総数(案分含)



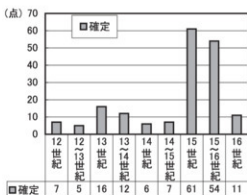
第86図 尾張・渥美総数比率



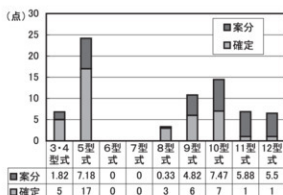
第87図 常滑 型式別(破片数)



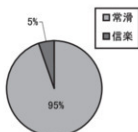
第88図 常滑 時期 世紀別(破片数)



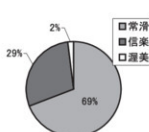
第89図 常滑壺 時期 世紀別 (破片数)



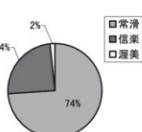
第90図 常滑鉢 型式別 (破片数)



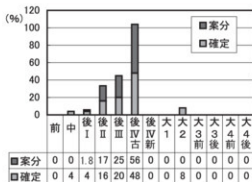
第91図 陶器鉢産地別



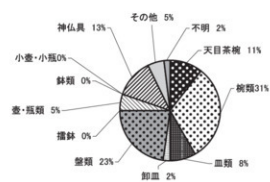
第92図 陶器壺産地別



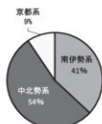
第93図 陶器類産地別



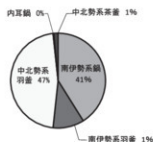
第94図 瀬戸美濃型式別 (破片数)



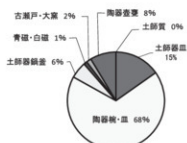
第95図 瀬戸美濃器種構成



第96図 土師器皿類



第97図 土師器鍋類



第98図 出土土器組成

このような名称で分類した。

出土した割合は、破片数と口縁部を12分割した内の残存する割合を分子数で示した口縁部残存率による。中北勢系が最も多く、南伊勢系がそれに次ぎ、京都系と考えられるものが9%見られた(第96図)。京都系土師器皿は、三重県内では亀山・関を中心とした地域から多く出土していること、多く出土する遺跡でも10%程度であることが指摘されており、小野城跡の状況もそれと一致する。

土師器鍋類については、中北勢系羽釜が47%、南伊勢系土師器鍋が41%を占め、出土量が多い(第97図)。中北勢系羽釜は、下川遺跡での分類¹⁾による口縁端部が外側上方に屈曲する羽釜B・Cが一般的であるが、小野城跡では55・123・198・240など羽釜Aに属する口縁端部が内曲するタイプがやや多く見られることは注目される。南伊勢系土師器鍋は第1段階のものが大半で、第2～4段階は少量出土するのみである。このことから、小野城跡における煮炊具は、南伊勢系土師器鍋から中北勢系羽釜に変化していったものと思われる。その他、内耳鍋の可能性のある小破片が2点出土しているが、口縁端部ごく一部のみの出土である。

第98図は、出土土器の組成をグラフにしたものである。陶器碗には山茶碗・小皿・片口鉢のほか、常滑産片口鉢もここに加えている。土師器は口縁部残存率で、山茶碗は底部残存率で、他は破片数でカウントしたものである。陶器碗・皿類が7割近くを占め、土師器の占める割合が低い。

6 区画別の遺物出土状況

第26～28表は、区画別の出土数を示したものである。いずれの遺物も区画3での出土量が最も多く、60～70%を占めるため、区画3を除いて最も割合の高いものにスクリーントーンを付けた。なお、表での数は案分とせず、両区画にわたって出土するものや型式が2つにわたるものは単純に0.5とした。なお、道路としたものはS R 4018から出土したものと及び第5次調査C地区で道路状遺構より北から出土したものである。その他は、表土掘削及び第5次調査A地区など区画が不明な地点で出土したものである。

区画別の状況を見るために、本来区画とは関係ない縄文時代から古墳時代前期の遺物の出土状況と、

近世以降の遺物の出土状況も表に入れた。調査区は削平されており、埋土も近世以降の耕作土が含まれているため、古いものがどれほど残り、新しいものがどれほど入り込む環境であったかを示す手がかりとなると考えたからである。なお、近世以降の遺物については、調査時にすべて取り上げたわけではなく、明らかに掘乱と考えられたものについては掘削を行っていないものも存在するため、あくまで参考である。近世以降の遺物は道路や調査区西部で多く、近世以降の利用または掘乱があったことを示している。縄文から古墳時代前期の遺物は区画2・3及び5・6で出土している。黒ボクが残存していたところからの出土である。

山茶碗を見てみると、区画3に次いで区画2からの出土が多く、他の区画からの出土は少ない。中世前期の段階では、区画3・区画2が中心であったと思われる。型式別では区画8で第3・4型式が出土しているが少量であり、区画1で第4型式が出土しているが第5型式には続かない。第5型式になると区画2・6・9で出土し、第6型式になるとすべての区画で出土している。しかし、区画1・4・7・8では第7型式以降の山茶碗は出土しておらず、区画6でも第11型式で1点出土しているのみである。区画1では第8・9型式は出土していないが第10型式が見られ、区画3は第12型式まで見られ、区画9は第8型式まで見られる。

常滑製品は、特に区画3での出土量が突出しており、傾向はつかみにくい。複数出土しているのが区画1・2・6のみであり、区画1は9型式、15世紀代の遺物があるが16世紀代の遺物はなく、区画2は15世紀及び15世紀～16世紀の遺物が出土し、区画6は2型式や6型式の甕が見られるという程度である。区画3は2型式の甕が出土しており、16世紀代までの出土が見られる。

古瀬戸・大窯製品は、やはり区画3が多く、区画1・2・4・5でも出土が見られる。

土師器も区画3の出土量が圧倒的であり、区画2や区画1、区画6では一定量の出土は見られるものの、他の区画では少数が出土しているのみである。

南伊勢系土師器鍋は全体としては第1段階のものが7割を占め、第2～4段階が10%前後となっている

			区画1	区画2	区画3	区画4	区画5	区画6	区画7	区画8	区画9	道路	その他	計	
山茶碗	山茶碗総数	残存率	21	74	1126	19	33	23	2	3	35	208	106	1650	
		百分率	1	4	69	1	2	1	0	0	2	14	6	100	
	破片数	9	26	348	6	5	7.5	1.5	2	7	63	32	507		
	百分率	2	5	70	1	1	1	0	0	1	13	6	100		
	第3型式	残存率	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2	2	6	
		破片数	0	0	0.5	0	0	0	0	0.5	0	1	1	3	
	第4型式	残存率	3	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	5	
		破片数	1	0	0.5	0	0	0	0	0.1	0	0	0	1.6	
	第5型式	残存率	0	9	166.5	0	0	4	0	0	13	20.5	26	239	
		破片数	0	3	49.5	0	0	1	0	0	2	3.5	4	63	
	第6型式	残存率	18	57	725.5	13	26	12	2	1	10	171.5	67	1103	
		破片数	7	19	241	4	3	5.5	1.5	1	3	54.5	22	361.5	
第7型式	残存率	0	4	115	6	4	0	0	0	9	10	11	159		
	破片数	0	3	33	2	1	0	0	0	1.5	2.5	5	48		
第8型式	残存率	0	0	34	0	1.5	0	0	0	3	2	0	40.5		
	破片数	0	0	7	0	0.5	0	0	0	0.5	0.5	0	8.5		
第9型式	残存率	0	0	17	0	1.5	0	0	0	0	0	0	18.5		
	破片数	0	0	7	0	0.5	0	0	0	0	0	0	7.5		
第10型式	残存率	0	4	62	0	0	0	0	0	0	2	0	68		
	破片数	0	1	8.5	0	0	0	0	0	0	1	0	10.5		
第11型式	残存率	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	7		
	破片数	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1		
第12型式	残存率	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	4		
	破片数	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
陶器鉢	山茶碗系総数	残存率	1	0	44	0	0	0	0	0	7	5	0	57	
		破片数	1	0	27	0	0	0	0	0	2	2	0	32	
	第5型式 (中野3・4)	残存率	0.5	0	14	0	0	0	0	0	0	0	0	14.5	
		破片数	0.5	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	9.5	
	第6型式 (中野5)	残存率	0.5	0	29	0	0	0	0	0	7	5	0	41.5	
		破片数	0.5	0	17.5	0	0	0	0	0	2	2	0	22	
	第7型式 (中野6a)	残存率	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
		破片数	0	0	0.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0.5	
	常滑産鉢総数	破片数	2	6	17	1	0	2	1	0	0	10	14	53	
		8型式	破片数	0	0	1	0	0	0.5	0	0	0	1	1	3.5
		9型式	破片数	2	1	2	0	0	1	0	0	0	1.5	3.5	11
		10型式	破片数	0	1	4.5	0	0	0.5	0	0	0	1.5	5.5	13
11型式		破片数	0	1	3	1	0	0	0	0	0	1.5	1.5	8	
12型式		破片数	0	1	2.5	0	0	0	0	0	0	1.5	1.5	6.5	
15世紀		破片数	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
15か16世紀		破片数	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	
16世紀		破片数	0	0	3	0	0	0	1	0	0	2	1	7	
信楽		破片数	0	0	2	0	0	0	0	0	0	3	0	5	
陶器壺・甕		常滑・渥美総数	破片数	3	6	111	1	1	4	0	0	1	40	14	181
		2型式	破片数			1			1						2
	3型式	破片数			1							1.5		2.5	
	4型式	破片数			0.5							0.5		1	
	5型式	破片数			3								1	4	
	6a型式	破片数			4			0.5				0.5	1.5	6.5	
	6b型式	破片数			0.5			0.5				0.5	0.5	2	
	7型式	破片数			0									0	
	8型式	破片数			1									1	
	9型式	破片数			0									0	
	10型式	破片数			0.5							1		1.5	
	11型式	破片数			0.5									0.5	
	12世紀	破片数			2							1	1	4	
12か13世紀	破片数			2			1						4		
13世紀	破片数			3							1		4		

残存率は、底部を12等分した内のどの程度残存しているかの分子数を示し、破片数は破片の数を示している。
 は、区画3、道路、その他を除く最も多く遺物が出土した区画を示す

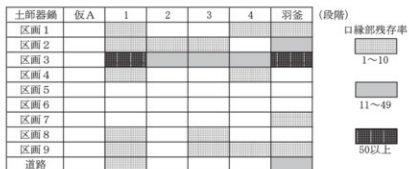
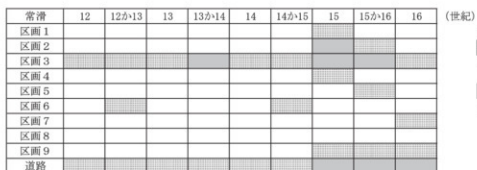
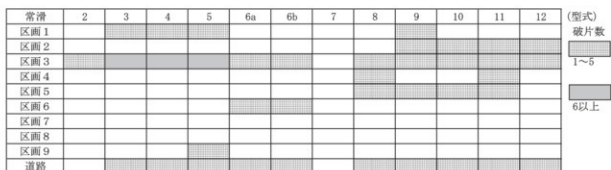
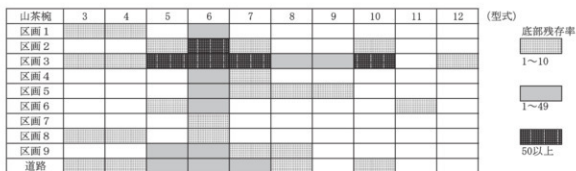
第26表 区画別・道路 遺物出土状況表1

			区画1	区画2	区画3	区画4	区画5	区画6	区画7	区画8	区画9	道路	その他	計
陶器壺・甕	13か14世紀	破片数			9							2	1	12
	14世紀	破片数			3							2		5
	14か15世紀	破片数			4			1				1	1	7
	15世紀	破片数	3	5	32	1					1	16	3	61
	15か16世紀	破片数		1	41		1					6	3	52
	16世紀	破片数			3							6	2	11
	信楽	破片数	0	1	62	1	0	0	0	0	0	5	4	73
瀬戸美濃	瀬戸美濃総数	破片数	1	1	30	2	1	0	0	0	0	5	2	42
	中期	破片数			1									1
	後Ⅰ	破片数		0.3	2		0.2					1	0.2	3.7
	後Ⅱ	破片数	1	0.3	4.5		0.2					1	0.2	7.2
	後Ⅲ	破片数		0.3	7.3	0.3	0.2					2	0.2	10.3
	後Ⅳ古	破片数			11.1	1.3	0.2					1	1.2	14.8
	後Ⅳ新	破片数			2.1	0.3	0.2							2.8
	大窯Ⅰ	破片数												0
	大窯Ⅱ	破片数			2									2
土師器	総数	破片数	94	277	2723	31	66	25	6	3	23	177	146	3571
		百分率	3	8	75	1	2	1	0	0	1	5	4	100
	南伊勢鍋総数	残存率	5	7	128	0	4	0	0	1	3	8	8	164
		破片数	4	7	107	0	4	0	0	1	3	8	8	142
	第1段階	残存率	3	3	89	0	3	0	0	1	1	6	8	114
		破片数	1	3	70	0	3	0	0	1	1	6	8	93
	第2段階	残存率	0	2	13	0	0	0	0	0	0	0	0	15
		破片数	0	2	13	0	0	0	0	0	0	0	0	15
	第3段階	残存率	0	2	11	0	0	0	0	0	2	1	0	16
		破片数	0	2	9	0	0	0	0	0	2	1	0	14
	第4段階	残存率	2	0	17	0	1	0	0	0	0	1	0	21
		破片数	1	0	11	0	1	0	0	0	0	1	0	14
	南伊勢羽釜	残存率	0	7	30	0	0	0	0	0	0	2	3	42
		破片数	0	5	18	0	0	0	0	0	0	2	3	28
	中北勢羽釜	残存率	3	14	138	0	0	0	2	0	1	21	7	186
		破片数	3	14	119	0	0	0	1	0	1	16	5	159
	中北勢茶釜	残存率	0	0	1	3	0	0	0	0	0	1	0	5
		破片数	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	3
	内耳鍋	残存率	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
		破片数	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	南伊勢皿	残存率	2	11	135	0	9	0	0	0	4	1	4	166
		破片数	2	5	58	0	2	0	0	0	1	1	4	73
	中北勢皿	残存率	13	7	187	8	0	0	0	0	4	12	9	240
破片数		4	4	119	3	0	0	0	0	3	8	5	146	
京都皿	残存率	2	1	26	2	6	0	0	0	0	5	0	42	
	破片数	1	1	15	1	2	0	0	0	0	1	0	21	
その他	貿易陶磁	破片数	1	5	14	0	2	1	1	0	0	5	7	36
		割合	3	14	38	0	6	3	3	0	0	14	19	100
	瓦器碗	破片数	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	瓦質土器鍋	破片数	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	砥石	破片数	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	3	7
	硯(転用含)	破片数	0	0	4	0	0	0	0	0	0	5	1	10
	墨書土器	破片数	0	0	9	0	0.5	0.5	0	0	0	2	2	14
	金属製品	破片数	0	0	4	0	0	0	0	0	0	7	1	12
	縄文～古墳前期	破片数	0	7	14	0	5	4	1	0	0	15	5	51
		残存率	0	14	27	0	10	8	2	0	0	29	10	100
近世以降	破片数	0	0	6	9	1	12	10	5	23	105	41	212	
	残存率	0	0	3	4	0	6	5	2	11	50	19	100	

残存率は口縁部を12等分した内のどの程度残存しているかの分子数を示し、破片数は破片の数を示している。

■は、区画3、道路、その他を除く最も多く遺物が出土した区画を示す

第27表 区画別・道路 遺物出土状況表2



第28表 区画別・道路遺物出土状況表3

るが、そのような状況を示すのも区画3のみである。

以上、区画毎の状況を見てきたが、区画3が圧倒的な出土量を示し、区画1・2・5・6・9では若干の出土量はあるもののあまり多くないため、傾向はつかみにくい。これには、区画3がもっとも削平がされていない区画であることも一因ではあろうが、そもその消費量が異なるのであろう。

区画3からは12世紀(山茶碗第3・4型式、常滑2型式)から16世紀前半(大窯II期・常滑11型式)、後半(常滑12型式)までの遺物が出土している。山茶碗第8・9型式(14世紀前・中葉)の時期の遺物がやや減るものの、ほぼどの時期の遺物も見られる。また、区画9や道路状遺構周辺から近世以降の遺物が出土していることから、道路状遺構は近世以降にも道路として利用されていた可能性が考えられる。

遺物から、陶器類は12世紀代のものが若干見られるが、土師器では確認できず、遺構の展開は12世紀後葉以降であると考えられる。13世紀前半(山茶碗第6型式・常滑5型式・南伊勢系土師器鍋第1段階)にはピークを迎え、多くの遺物が確認される。その後13世紀後葉までの遺物は多く出土しているが、14世紀に入ると遺物はあまり見られなくなる。その後、14世紀後葉になると再び遺物は増加し、15~16世紀代の遺物は多く出土していることが明らかとなった。

7 他の遺跡との比較

北勢地域の桑名市志知南浦遺跡⁴、四日市市西ヶ広遺跡⁵、同市伊坂城跡⁶、亀山市大会遺跡⁷、同市三寺地内遺跡群⁸では、陶器鉢の産地別比率や瀬戸美濃産製品の出土量が提示され、比較検討が行われている。小野城跡もこれらと比較検討したい。なお、陶器鉢の第99図は志知南浦遺跡、第100図は志知南浦遺跡と伊坂城跡の発掘調査報告書に提示されたデータを使用している。

鉢の産地別比率(第99図)では、北勢北部に位置する志知南浦遺跡、伊坂城跡、西ヶ広遺跡では瀬戸美濃産鉢と常滑片口鉢の比率がほぼ同数なのに対し、北勢南部に位置する大会遺跡や三寺地内遺跡群では、大半が常滑片口鉢である。小野城跡では中世の瀬戸美濃産鉢は1点も出土しておらず、北勢南部で瀬戸美濃産鉢があまり出土しないことと一致する。ただし、大会遺跡・三寺地内遺跡群とともに、大窯製品

が出土していないことに関連するかもしれない。また、小野城跡では量は少ないが信楽産が伊賀産と思われる片口鉢が3点出土していることが注目される。

小野城跡の瀬戸美濃製品の出土量は、0.005点/㎡である。志知南浦遺跡の報告書によると、志知南浦遺跡では0.142点/㎡、西ヶ広遺跡では0.012点/㎡、伊坂城跡では0.059点/㎡、大会遺跡では0.005点/㎡、三寺地内遺跡群では0.017点/㎡であり、この中では大会遺跡と同値であり、他の遺跡に比べるとかなり少ない。瀬戸美濃製品の時期別グラフ(第100図)では、後IV古段階まで遺物の出土はあるが、後IV新段階以降の遺物が見られない点で、大会遺跡と一致する。三寺地内遺跡群でも後IV新段階の遺物が見られるものの大窯段階の遺物は見られない。しかし、大会遺跡、三寺地内遺跡群とも常滑製品は11型式の遺物が10型式よりは減るものの出土しており、大窯製品が輸入されてもおかしくない時期である。北勢北部では大窯製品は一定量出土している状況とやや異なる。常滑製品に対し、瀬戸美濃製品(大窯製品)は北勢南部地域には入りにくい状況があったのかもしれない。

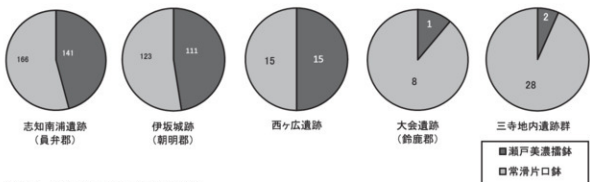
瀬戸美濃製品の器種別の傾向としては、小野城跡では碗類の比率が高く、盤類・天目茶碗、皿類と続く。出土遺物の種類はやや偏っている傾向がある。碗類の多い傾向は、古瀬戸後IV新段階を中心とする西ヶ広遺跡や古瀬戸の状況を見た場合の志知南浦遺跡で多種の遺物が出土しているのと比べると大きく異なり、居住者を考える上で注目される。

8 砥石・墨書土器・硯について

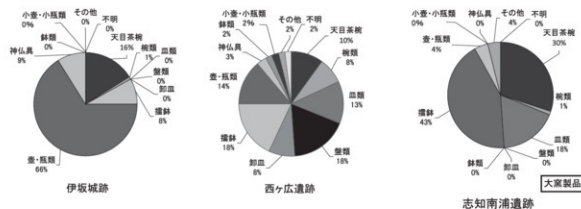
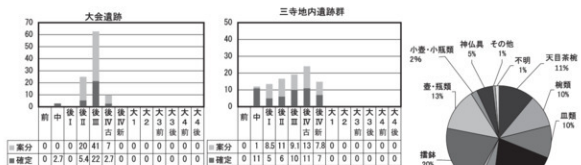
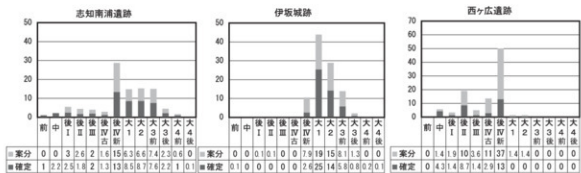
出土位置は、第27表に示したとおりである。

砥石は、全体で7点出土した。区画は区画3の1点のみで、道路状遺構やその他から出土している。

墨書土器は14点出土しており、山茶碗12点、登窯第1小期の鉄絵皿1点で内面に墨痕のある土師器皿が1点出土している。山茶碗・鉄絵皿はいずれも底部外面に墨書されている。時期は第5型式2点、第6型式5点、第7型式2点、第7か8型式2点、不明1点である。小破片のため判読は難しいが、「の」「井」状の略押と思われるものの他、花押2点、「南」1点、「阿」または「門」・「條」と思われるもの2点、「龍承」または「龍委」などが考えられる人



第99図 北勢地域の鉢の産地別比率



第100図 北勢地域の瀬戸美濃製品出土状況

名と思われるもの1点などがある。出土地点は区画3が多い。墨書土器で注目されるのは、SB5084のPitからの2点の出土である。1点は判読できない。1点は下半分のみ出土であるが、上部が「口仏」、下部が「阿」「門」「條」などと読める可能性がある。硯は、石製品のほか、瓦質の硯も出土している。転用硯と考えたものはすべて山茶椀で、体部が打ち欠かれ、内面が磨耗し、墨痕が見られるものである。

第4節 自然科学分析のまとめ

小野城跡では、鉄滓の成分分析、煙管・小皿の成分分析を行った。鉄滓については、調査区内で粘土が貼られた土坑や、炭化物が多く見られる土坑が複数見つかり、また過去の調査からも鍛冶が行われた可能性が指摘されている³⁰ことから、鍛冶工房跡が存在した可能性を考え、分析を行った。

三重県内の鉄滓の分析は、東員町広山B遺跡³¹、松阪市西野田遺跡³²、同市西肥留遺跡³³、同市東沖遺跡³⁴、玉城町楠ノ木遺跡³⁵などで行われている。楠ノ木遺跡では、いなべ市中貝戸遺跡、玉城町蚊山遺跡、松阪市東野B遺跡、津市家野遺跡の鉄滓も参考資料として分析されている。

小野城跡の分析結果は、第6章のとおりである。鉄滓はSK5049から出土した2点である。その他の土坑についても粘土や埋土を一部持ち帰り、洗浄・篩がけなどを行ったが、見つけることはできなかった。鉄滓はいずれも純度の高い(製錬工程起源の不純物をほとんど含まない)鉄素材を赤熱状態に加熱して、鍛打加工した時に生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。ある程度精製された鉄素材(または廃鉄器)を原料として、鍛造鉄器を製作していた可能性が高いと考えられる。東沖遺跡例や西野田遺跡例でも鉄

硯・転用硯は区画内では区画3のみで出土している。絶対数が少なく、他の遺物も大半を占める区画3からの出土のため断定はできないが、区画3が中心的な役割を占める区画である裏づけになるのではないかと考えられる。

素材または廃鉄器を利用したという結果が得られており、三重県内の中世遺跡における鍛冶行為では、一般的な状況を示していると思われる。

煙管・小皿では、溶接物・付着物を特定するため、及び製品の成分を調べるため分析を行った。

煙管の材質同定は、松阪市中林・中道遺跡³⁶、志摩市浄土近世墓地³⁷で分析が行われている。小野城跡の煙管は、本体の材質は真鍮(黄銅)製で、真鍮軸で接合されたと考えられる。なお、浄土近世墓地出土煙管や中林・中道遺跡の接合部分においても、スズ(と鉛)を含む真鍮軸が確認されている。

小皿は、青銅製で、鍍銀か銀箔が施されていた可能性が考えられる。接合部分はスズや鉛を加えた銅合金で接合された可能性が考えられる。黒色付着物は、お歯黒と考えられたが、銅錆等の影響が大きくお歯黒と断定できる結果を得られなかった。

小野城跡からは、鍛造鉄片や道具地金と考えられる鉄製品も出土している。また、焼けた粘土や炭化材が出土した土坑が集中して検出されており、周辺で鍛冶が行われたものと考えられる。今回は報告者の力量不足により検討を加えられないため、資料の提示にとどめる。今後の資料の蓄積が待たれる。

第5節 まとめと今後の課題

小野城跡の調査は、諸般の事情により一旦中断となる。再開の見通しは立っていないため、今回のまとめ及び再開後の課題について述べておく。今後の課題については、現地にてご指導賜った中井均氏によるところが大きい。

今回の調査は、小野城跡の所在する丘陵の北東部の一帯を調査したのみであり、不明点が多い。

地表面に遺構が残っていないことから、開墾などによる削平を受けていることは明らかである。今後の調査では、地表面に遺構が残る部分に調査が及ぶため、小野城跡の状況がより明らかになるであろう。

第5次調査区B地区の北側は現在墓地であるが、土塁が複雑に入り組んでおり、虎口が確認される可能性がある。北側斜面についても、今回は自然地形

で遺構は確認できなかったが、今後の調査も確認が必要である。調査で確認された道路状遺構は、B地区の北側の土塁群とは関連が少なく、北側の土塁群に関連する通路が確認される可能性がある。

中井氏のご教示によれば、北側の土塁群は通常の城跡であれば主郭として利用される場所であり、防壁に関しては北側の斜面がその役割を担っており、土塁は本来必要がないものであり、小野城跡の主郭と考えられる位置から見て、本来はこの場所に遺構はなく、陣城として遺構が形成されたのではないかとのことである。注目されるのは、北側の谷を挟んだ対岸に走り下城²⁹が位置しており、16世紀半以降の陣城であった可能性が指摘されている。

天正18年以前には、東海道が小野を通過していた可能性があることも指摘されており、今回見つかった道路は、東海道自体かどうかは不明であるが、東海道から分岐した支線のような役割を担っていた可能性も考えられる。三日平氏の乱(1204年)の際に若菜五郎が「城郭」を築いた「小野」が当地域を示すかどうかは懐疑は乏しいが、東海道を閉鎖するために小野に「城郭」を築いた時期には、この地域には集落が広がっていたことが明らかとなった。

小野氏については、笠井賢治氏が瑞光寺文書を手がかりとして検討されている³⁰。そこにはいくつかの年号が見られ、15世紀中葉(文安・徳仁など)～16世紀後葉(永祿など)のものである。小野氏が小野城跡に住んでいたかどうかとも地誌類などからの想定ではあるが、小野城跡でも同時期に生活が営まれていたことが明らかとなった。

小野城跡は台地に立地しており、現在残る「オオホリ」及びそれに伴う土塁の東から台地東端までが城域であったと考えられる。土塁の中央部は削平されているものの丘陵南部でも確認されており、この土塁により南北350m、東西400mの範囲が区画される。この土塁は丘陵が最も狭くなるところに築かれており、小野城跡とされる一帯は1つの城域というよりも、居館と集落を取り込んだ形状を呈していたと考えられる。この土塁は工事予定地外であるが、周辺の調査により、小野城跡の性格がより明らかになることが期待される。(水谷豊)

註

- 1 『天王道跡発掘調査報告Ⅱ—第二次調査 遺構編』(三重県教育委員会、1983年)
- 2 『埋蔵文化財(中)中遺跡 発掘調査概要Ⅳ 田を拓く』(亀山市教育委員会、2002年)
- 3 『嶋根田』(三重県埋蔵文化財センター、2001年)
- 4 『松山道跡』『三重県史 資料編 考古2』(三重県、2008年)
- 5 『阿山郡大山田村 歌野道跡』『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(三重県教育委員会、1983年)
- 6 小山憲一「V 結語」『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 発シB遺跡—第3次調査—』(三重県埋蔵文化財センター、2001年)
- 7 『Ⅱ 第30次調査』『三重県考古跡調査事務所年報1980 史跡宮崎宮跡 発掘調査概要』(三重県教育委員会・三重県考古跡調査事務所、1980年)
- 8 徳綱克己「カマドに伴う円筒形土製品について」『龍谷大学考古学論集Ⅰ』(龍谷大学考古学論集刊行会、2005年)
- 9 『小野城跡』(亀山市教育委員会、1991年)
- 10 『市場道跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、2003年)
- 11 『多気遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1993年)
- 12 濱辺一機「伊勢における中世後期の土師器Ⅱ—京都系土師器の検討を中心に—」『Mie history』vol.17 (三重県歴史文化研究会、2006年)
- 13 「安芸郡雲津町 下川遺跡」『伊勢寺跡・下川遺跡ほか』(三重県埋蔵文化財センター、1990年)
- 14 『志知南浦遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、2008年)
- 15 『西ヶ丘遺跡(第3・4次)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、2006年)
- 16 『近畿自動車道名古屋古墳群(第二名神) 愛知県境～四日市JCT建設事業に伴う伊弉城跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、2003年)
- 17 『大倉遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、2007年)
- 18 『三寺地内遺跡群発掘調査報告～岩瀬遺跡・金森遺跡・嶋ノ前遺跡・地蔵前遺跡～』(三重県埋蔵文化財センター、2006年)
- 19 前掲9
- 20 『一般国道475号東海環状自動車道山A遺跡・山B遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、2009年)
- 21 『西野田遺跡発掘調査報告(第1・2・3次調査)』(三重県埋蔵文化財センター、2009年)
- 22 『西肥留遺跡発掘調査報告(第1・2・3・5次)』(三重県埋蔵文化財センター、2008年)
- 23 『下茅原遺跡(第1次・第2次)、東沖遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、2009年)
- 24 『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告—第3分冊一橋ノ木遺跡』(三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1991年)
- 25 『一般国道23号中勢道路(14工区)建設事業に伴う中林・中道遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、2009年)
- 26 『浄土近世墓地調査報告—近世墓地の発掘調査と周辺文化財調査—』(三重県埋蔵文化財センター、2006年)
- 27 大川機「金属生産・加工の足跡～金属生産関連遺物の調査その1～」『Mie history』vol.20 (三重県歴史文化研究会、2009年)
- 28 『走り下城跡』(亀山市教育委員会、1988年)
- 29 笠井賢治「中世鈴鹿郡の小領主の事例—小野城跡と小野氏について—」『伊勢の中世』第63号(伊勢中世史研究会、2001年)

附編 第1次調査

第1節 はじめに

一般国道1号関バイパス建設事業では、小野城跡以外にも周知の遺跡である大冷ケ遺跡・長田遺跡・走り下遺跡の3遺跡が範囲として含まれている。そのため、平成20年度に大冷ケ遺跡、平成21年度に長田遺跡・走り下遺跡の第1次調査を実施している。

大冷ケ遺跡¹⁾は、亀山市関町大字鷺山に、長田遺跡・走り下遺跡は同町大字会下に所在する遺跡である。鈴鹿川の支流である桜川と、さらにその支流で

ある石場川の合流する付近が、これらの遺跡の中央部にあたる。大冷ケ遺跡の西部は、谷筋に形成された扇状地であり、東部は桜川の両岸にできた小規模な沖積地である。長田遺跡・走り下遺跡は同様の沖積地と小野城跡・走り下城跡が立地する段丘裾部に位置する。標高は76～83mほどで、調査前は水田・畑地・茶畑として利用されていた。

第2節 大冷ケ遺跡

1 はじめに

調査は、桜川の左岸をA区、石場川の右岸をB区と設定し、A区8箇所、B区4箇所の合計12箇所のトレンチを設けて行った。各トレンチの幅は2m、総延長は600m、調査面積は合計1,200㎡となった。調査期間は2008（平成20）年10月6日～11月28日である。

2 調査の概要

今回の調査では、明確に遺構といえるものは確認できなかった。A・B区ともに、おおむね、表土・耕作土の下には、粘質土層があり、その下は砂礫層となっている。以下、区ごとに詳述する。

A区 西側のA1トレンチでは、水田の床土の下に、さらに古い耕作土と床土と思われる層が確認できた。この床土から山茶²⁾と天目茶³⁾の小片が各1点出土している。おそらく、中世～近世にかけて耕作されたものと思われるが、削平されているらしく、畦畔などは確認できない。

A1トレンチは南に向かってゆるやかな落ち込みがあり、砂や礫が厚く堆積している。これらは、石場川の水流の働きによって形成されたものと思われる。前述の中世～近世の耕作層はこの堆積の上に形成されている。

A2トレンチでは、北側に桜川の旧河道と考えられる落ち込みを確認した。砂礫と粘質土が堆積している。流路が変わり、一旦湿地か沼となった後、再

び水流の復活した時期のあったことが窺える。また、砂礫層はトレンチ全面に広がっていることから、川の氾濫による堆積と考えられる。この上に、盛土して現代まで続く耕作土層が形成されている。この盛土は、東西方向に掘削したA3トレンチでも確認できる。なお、砂礫層からは、山茶⁴⁾(1・3)・白磁⁵⁾(6)が出土している。

A区東側のA6・A7・A8トレンチでは、深いところで、1.0m以上もの粘質土の堆積がみられ、その下で砂礫層が確認できる。粘質土層から山茶⁶⁾、粘質土層から山茶⁷⁾と土師器羽釜⁸⁾が出土している。以上のことから、A区の東側は桜川の後背湿地であり、中世～近世に耕作地となるまでは、湿地か沼のような状態であったと考えられる。

B区 B1～B3トレンチでは、地表から0.3～0.5mの深さで、砂礫の混入する層が0.2～0.5m以上の厚さで堆積している。それらの層の上に整地・盛土して現代まで続く耕作層が形成されている。各トレンチから中世～近世の所産とみられる土師器・陶器・磁器の小片が合わせて10数点出土している。これら遺物のほとんどは、B1トレンチとB3トレンチの交差地点付近より標高の低い場所にしか堆積がみられない層より出土している。これより標高の高い場所からの出土遺物は、わずかに時期不明の陶器片が1点あるのみである。このような状況から、B1トレンチとB3トレンチの交差地点付近より標高の高い場所の耕作地は、

近代以降に開墾されたものと思われる。B区で最も南側の標高の低い位置に設定したB4トレンチでは、流路跡を確認した。石場川に流れ込んでいた小川であると思われる。B4トレンチ全面には砂質土が広がっており、石場川の氾濫に伴うものと思われる。以上のように、B区の北部では、丘陵から流出した砂礫が斜面に堆積しており、南部では石場川の溢水に伴う砂質土が広い範囲に堆積している。B区は降水量が多くなると不安定になりやすい土地であり、生活の痕跡は確認できなかった。

3 遺物

遺物は確認できなかったが、各トレンチからは、それぞれ、1～6点ほどの遺物が出土した。中世～近世までの土師器・陶器・磁器の小片のみで、総重量は1.0kgである。1～4は山茶碗である。1は比較的高台の作りが丁寧なこと、底部内面と体部内面の境に明瞭な稜や凹みが見られないことから、藤澤編年の第5型式に相当するものと思われる。高台には初段痕が明瞭に残っている。2・3は高台の作りが1に比べ粗雑なこと、底部の器壁が厚いことなどから第6型式に相当するものと思われる。2の高台には初段痕が明瞭に残るが、3はローリングによる摩耗が著しく、初段痕の有無は不明である。4は小型化し、体部が直線的であることから、第7型式に相当するものと思われる。内面がゆがり摩耗しており、食器以外の用途にも使用された可能性が考えられる。上記4点は、12世紀末～13世紀前半の所産である。

5は天目茶碗である。底部は欠損している。おそらく15世紀の産と思われる³。6は白磁碗である。

口縁が玉縁となっており、碗IV類に相当するものである⁴。前述の山茶碗より若干古く、12世紀前半

の産とみられる。以上の遺物の他に、土師器羽釜・甕、常滑産と思われる陶器鉢、染付の磁器がある。いずれも小片であり詳細は不明であるが、おそらく、土師器と陶器は中世、磁器は近世の産と思われる。

4 小結

今回の調査では、遺構は確認できなかった。遺物は、盛土と砂礫層の間の粘質土層から中世～近世の所産とみられる土師器・陶器・磁器が少量であるが出土した。なお、中世以前の遺物は確認できなかった。層序から、A区は桜川の氾濫原・後背湿地であり、B区は礫や土砂が堆積する扇状地であることが明確に確認できた。A・B区共に、中世～近世以前の開発や生活の痕跡は確認できない。中世の遺物が若干出土していることから、この時期に遺跡の周辺にまで集落が広がってきたことが分かる。しかし、遺跡内は、依然として水捌けの悪い湿地や、荒地・山林等の状態であり、建物等が建てられることはなかったようである。現在のように、耕作地として利用されるようになったのは、中世～近世に盛土が行われ、整地されてからであると思われる。

(勝山孝文)

註

- 1 「大冷ケ」の読みは、行政上は「オビヤケ」であるが、地元の人々は普通、「オオビヤケ」と発音している。
- 2 山茶碗の編年と実年代観は以下の文献を参考にした。藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号(三重県埋蔵文化財センター、1994年)
- 3 天目茶碗の編年と実年代観は、以下の文献を参考にした。藤澤良祐「古瀬戸」『概説 中世の土器・陶磁器』(中世土器研究会編、1998年)
- 4 白磁の分類と実年代観は以下の文献を参考にした。山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』(中世土器研究会編、1998年)

第3節 長田遺跡・走り下遺跡

1 はじめに

長田遺跡・走り下遺跡の調査は、平成21年6月25日から9月9日にかけて実施した。調査は長田遺跡7箇所、走り下遺跡8箇所のトレンチを設定して行った。トレンチは幅2m、延長は長田遺跡140m、走り下遺跡260mで、総面積は800㎡である。以下、トレンチごとに概述する。

2 長田遺跡概要

Aトレンチは、人力により掘削を行った。現況は荒蕪地である。南北2m、東西7mで設定し、北側は標高約82.9m、南側は約82.6mである。北西隅で表土下約0.7m(標高約82.2m)で地山が確認でき、湿地化していたのか地山と考えられる青灰色シルトの上に粘性の強い土が堆積している。これを盛土により成形していることが明らかとなった。遺物は近

世の土師器焙烙片が出土したのみであり、遺構は確認できなかった。

B～Gトレンチは、重機により掘削を行った。現況は水田・荒蕪地である。いずれのトレンチでも数面の水田面が確認できた。基本層序は、表土・耕作土・数枚の水田面・地山である。地山は明黄橙色の粘質土が大半であるが、部分的にはその下層である砂礫層や、旧河道が確認されることもある。いずれも遺構は確認できず、遺物はGトレンチから藤澤福年7型式以降と思われる山茶碗の小片が出土したのみである。

3 走り下遺跡概要

いずれのトレンチも重機により掘削を行った。現況は水田・畑地・荒蕪地である。表土・耕作土を除去すると大半のトレンチでは、山土を利用した盛土が深いところでは1m近く行われていた。その下は旧流路と考えられる砂礫層及び湿地化していたと考えられるような粘質土層であった。地山と考えられる黄褐色砂質土を確認できたのはA地区の一部のみ

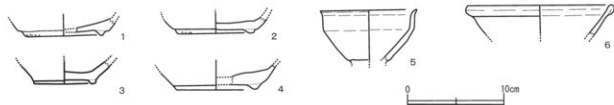
であった。

盛土下には、多くのトレンチで暗渠が施されており、盛土は近現代に行われたものと考えられる。おそらくは、旧桜川の氾濫源となっており、安定していなかった土地を、近現代になって盛土・暗渠設置を行い、畑として利用するようになったと考えられる。

4 小結

長田遺跡・走り下遺跡では、明確な遺構は検出されず、遺物も小破片が数点流れ込んでいる状況で出土したのみであった。特に、走り下遺跡ではほとんどのトレンチで盛土が確認され、盛土下に暗渠が確認できる例もあることから、畑をするにしても水はけをよくする必要があったと考えられる。また、小野城跡の北側斜面でも確認できるように斜面はかなり崩落しており、その崩落土を利用したと考えられる山土で盛土していることから、当地は生活には不向きであったと考えられる。

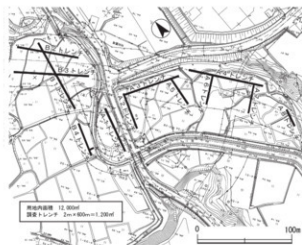
(水谷豊)



第101図 大冷ヶ遺跡出土遺物実測図(1:4)

No.	実測番号	種別 器種等	出土位置 遺構名	計測値 (cm)	残存度	調整・技法の特徴	胎土	施成	色調	備考
1	001-03	陶器 碗	A3トレンチ 包含層	高台径 8.3	底部 2/12	外:フタナ、糸切り、貼付後ナ 内:フタナ	密	良	灰白 5Y7/1	山茶碗 粉殻灰
2	001-04	陶器 碗	A3トレンチ 包含層	高台径 7.8	底部 4/12	外:フタナ、糸切り、貼付後ナ 内:フタナ	やや密	良	灰白 2.5Y7/1	山茶碗 粉殻灰
3	001-02	陶器 碗	A2トレンチ 包含層	高台径 8.3	底部 2/12	外:フタナ、糸切り、貼付後ナ 内:フタナ	密	良	灰白 5Y7/1	山茶碗
4	001-01	陶器 碗	A区 表探	高台径 6.4	底部 6/12	外:フタナ、糸切り、貼付後ナ 内:フタナ	密	良	灰白 5Y7/1	山茶碗 粉殻灰
5	001-05	陶器 碗	B1トレンチ 包含層	口径 10.0	口縁部 1/12	外:フタナ、施軸 内:フタナ、施軸	密	良	口縁部:黄 7.5YR4/4 内外体部:黒 10YR1.7/1	天目茶 碗
6	001-06	白磁 碗	A3トレンチ 包含層	口径 15.0	口縁部 1/12	外:フタナ、施軸 内:フタナ、施軸	密	良	輪:灰白 5Y7/2 裏地:灰白 5Y7/1	碗Ⅳ類

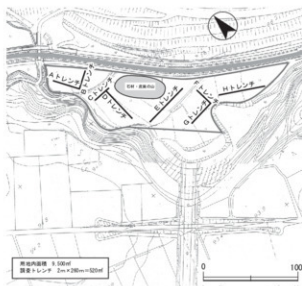
第29表 大冷ヶ遺跡出土遺物観察表



第 102 図 大冷ケ遺跡トレンチ位置図 (1 : 4,000)



第 103 図 長田遺跡トレンチ位置図 (1 : 4,000)



第 104 図 走り下遺跡トレンチ位置図 (1 : 4,000)

調査トレンチ No.	調査面積 $m \times n$ (㎡)	遺構	遺物	備考
A1	2×50 (100)	-	山茶碗 1 土師器 2	遺物はいずれも小片 (以下同)
A2	2×40 (80)	-	山茶碗 2 土師器 2	
A3	2×60 (120)	-	山茶碗 3 土師器 2 白磁 1	
A4	2×80 (160)	-	陶器 (常滑ヤ) 1	
A5	2×30 (60)	-	土師器 2	
A6	2×30 (60)	-	山茶碗 1	
A7	2×30 (60)	-	山茶碗 1	
A8	2×20 (40)	-	山茶碗 2 土師器 (羽釜) 1	
B1	2×80 (160)	-	山茶碗 2 土師器 1	
B2	2×60 (120)	-	刃目茶碗 1	
B3	2×80 (160)	-	山茶碗 1 土師器 (羽釜) 1	
B4	2×40 (80)	-	山茶碗 1 土師器 2	

第 30 表 大冷ケ遺跡 第 1 次調査結果一覧表

調査トレンチ No.	調査面積 $m \times n$ (㎡)	遺構	遺物	備考
A	2×7 (14)	-	土師器畑片 1	人力掘削
B	2×18 (36)	-	-	
C	2×25 (50)	-	-	
D	2×30 (60)	-	-	
E	2×20 (40)	-	-	
F	2×20 (40)	-	-	
G	2×20 (40)	-	山茶碗片	

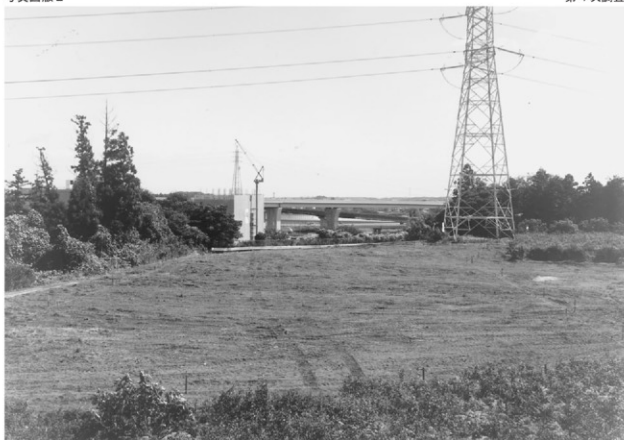
第 31 表 長田遺跡 第 1 次調査結果一覧表

調査トレンチ No.	調査面積 $m \times n$ (㎡)	遺構	遺物	備考
A	2×30 (60)	-	-	-
B	2×20 (40)	-	-	-
C	2×20 (40)	-	-	-
D	2×40 (80)	-	信楽産陶器片	-
E	2×50 (100)	-	-	-
F	2×20 (40)	-	-	-
G	2×30 (60)	-	-	-
H	2×50 (100)	-	-	-

第 32 表 走り下遺跡 第 1 次調査結果一覧表



航空写真



調査前（西から）



全景（西から）



中央部（北から）



SB4001（西から）



SB4002 (南から)



SB4023・4025 (南東から)



SB4023 (北から)



SB4027 (南から)



S K4016他 (北から)



S K4017完掘 (南から)



A2地区西部（東南から）



A2地区南部（北西から）



A 1 地区全景（西から）



A 2 地区作業風景（南から）



A 2 地区 S A 5005（西から）



A 2 地区 S A 5003、S D 5004（西から）



A 1 地区 S R 5010 道路状遺構（南から）



B地区全景（東から）



B地区西部（南から）



B地区SR5058(東から)



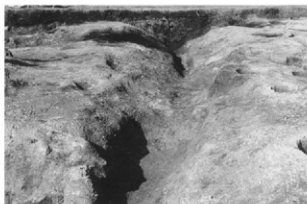
B地区SD5057(東から)



B地区SH5074煙道（西から）



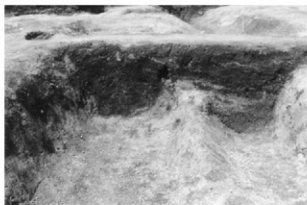
B地区SH5074煙道（北から）



B地区SD5051（南から）



B地区SD5032（西から）



B地区SD5051（南から）



B地区 S F5077 (南から)



B地区 S D5062 (北から)



B地区 S K5042 (南から)



B地区 S K5047 貼床 (南から)



B地区 S K5046 炭・焼土 (南から)



B地区 S K5046 炭・焼土 (西から)



B地区 S K5063 (西から)



B地区 S K5038 (西から)



C地区全景（西から）



C地区西部（南から）



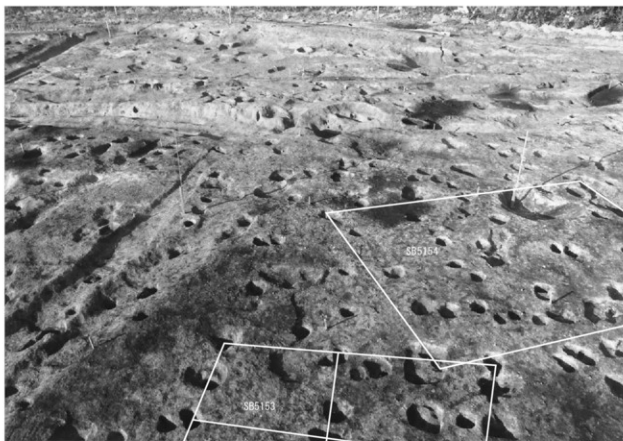
C地区SD5104道路状遺構（東から）



C地区SD5104道路状遺構（東から）



C地区SR5141 (南から)



C地区SB5153・5154 (南から)



調査前（東から）



全景（東から）



西部（南東から）



北東部（南から）



S R6012 (東から)



S R6025硬化面 (東から)



S D6003他（西から）



S D6009（東から）



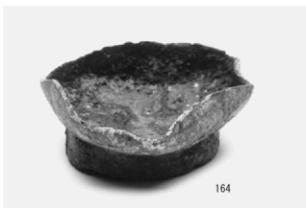
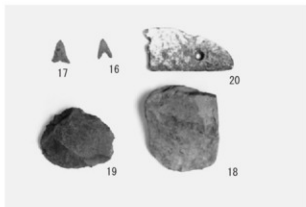
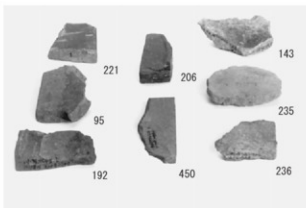
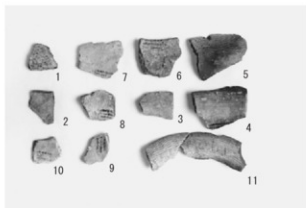
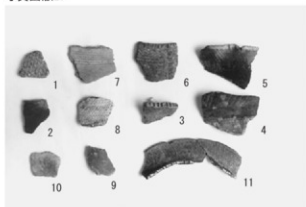
S D6009土層断面図（東から）

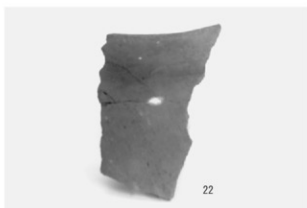
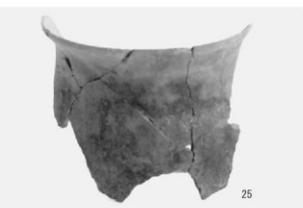
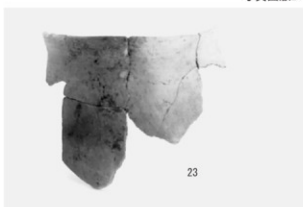


S R6012土層断面（西から）

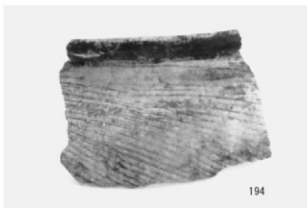
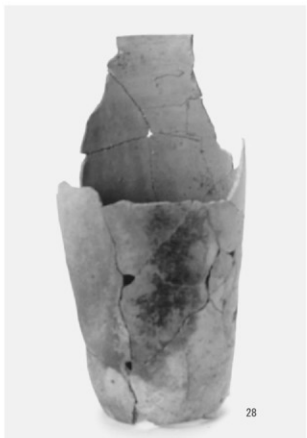
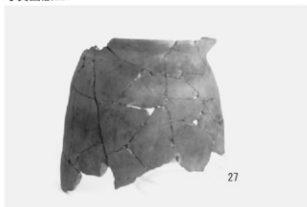


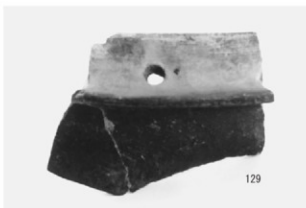
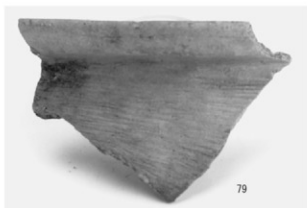
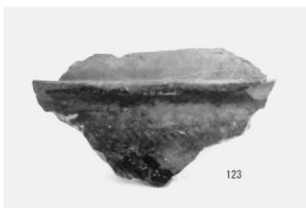
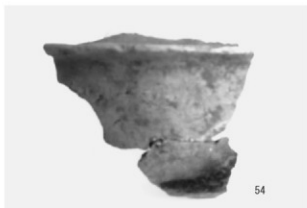
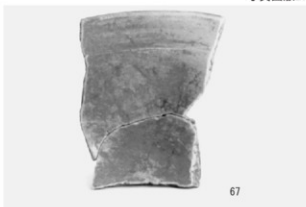
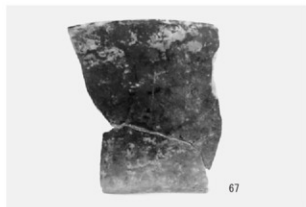
S R6012硬化面除去後（東から）





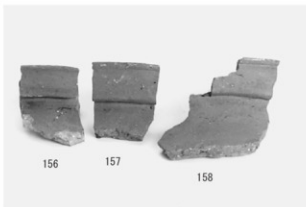
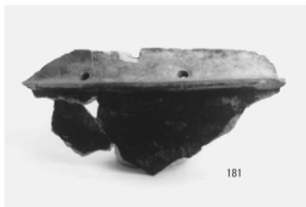
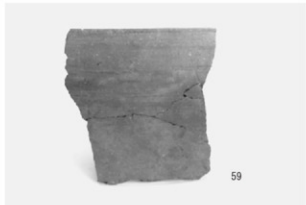
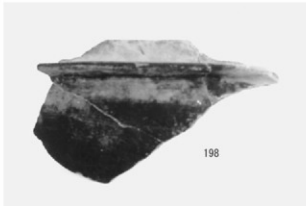
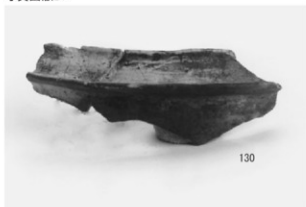
出土遺物 2



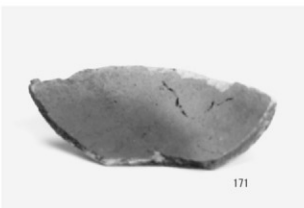
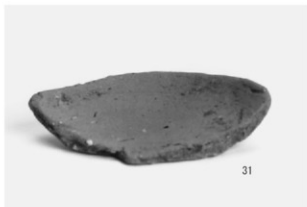
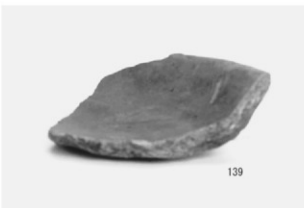
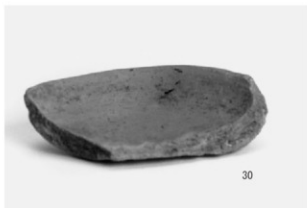
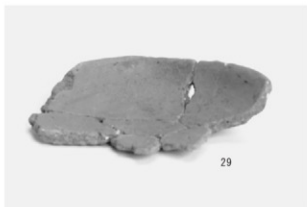


出土遺物 4

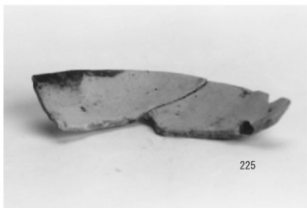
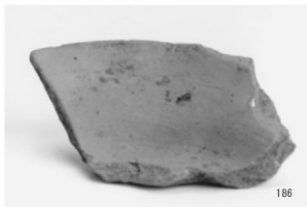
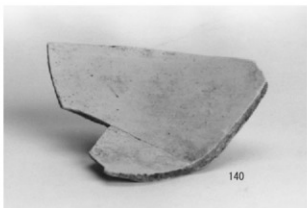
写真図版24

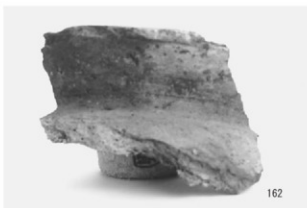


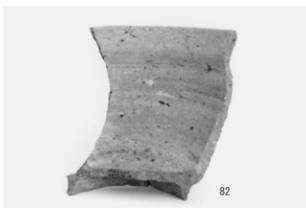
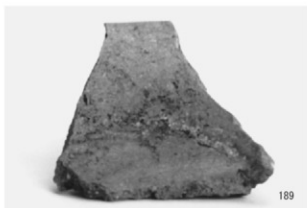
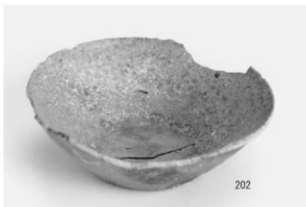
出土遺物 5

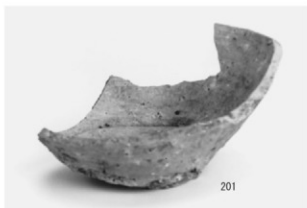
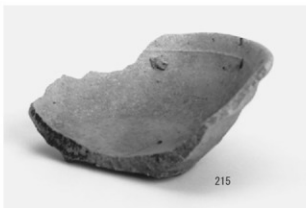
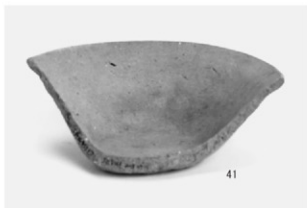


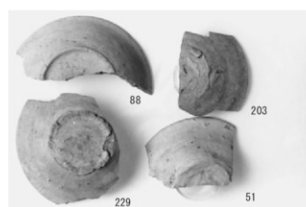
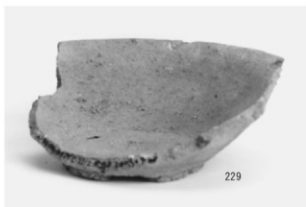
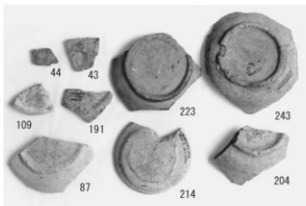
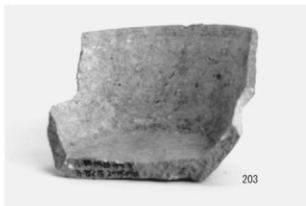
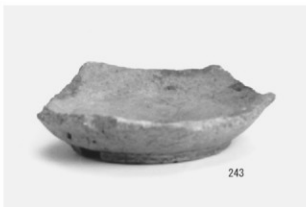
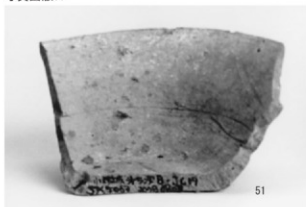
出土遺物 6

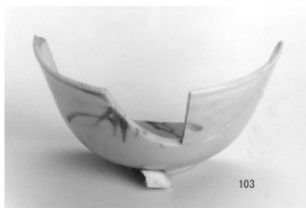
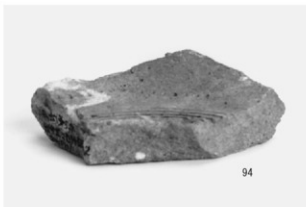
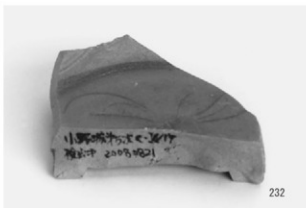












出土遺物12

報 告 書 抄 録

ふりがな	いっぽんこくどういちごうせきばいぼすけんせつじぎょうにともなる おのじょうあととはくつちようさほうこうーだいよん・ご・ろくじちようさー							
書名	一般国道1号関バイパス建設事業に伴う 小野城跡発掘調査報告ー第4・5・6次調査ー							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財報告315-1							
シリーズ番号								
編著者名	長谷川哲也 竹田憲治 勝山孝文 水谷豊							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	西暦2010年(平成22年)3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おのじょうあと 小野城跡	おのやまし おののしろ 亀山市小野町 おのこのしろ 字殿内ほか	210	a 123	34 51 21 ~ 24	136 24 21 ~ 31	2007.9.3~ 2008.1.31 2008.5.20~ 2008.12.15 2008.11.12~ 2009.2.19	8,280	一般国道1号 関バイパス 建設事業
おひやけいせき 大冷ケ遺跡	おのやまし せせらし 亀山市関町 おしやまおひやけ 鷺山字大冷ケ	210	b 71	34 51 46 ~ 50	136 23 49 ~ 24 2	2008.9.16~ 2008.11.28	1,200	同上
はしりやせき 走り下遺跡	おのやまし せせらし 亀山市関町 えびあきしりげ 会下字走り下	210	b 73	34 51 27	136 24 16	2009.6.24~ 2009.9.9	520	同上
おさだいせき 長田遺跡	おのやまし せせらし 亀山市関町 えびあきおさだ 会下字長田	210	b 72	34 51 37	136 24 7	2009.6.24~ 2009.9.9	280	同上
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
小野城跡	城館跡	古代 中世		竪穴住居 掘立柱建物、土坑、 道路状遺構、溝など		古代・土師器(土管状土 製品・甕) 中世:土師器(皿・鍋・ 羽釜)陶器(山茶碗・小 皿・常滑・古瀬戸・大甕) 瓦質土器(鍋・碗)、磁器、 石器、石製品(硯・砥石) 金属製品(銅銭・青銅小 皿・火打石・鉄鎌など)		波板状凹凸遺構、 硬化面を持つ遺 跡状遺構を確認。 道路状遺構の南 には掘立柱建物 など屋敷地を検 出。
大冷ケ遺跡	散布地	中世		なし		中世土師器小片、山茶碗 小片、白磁碗小片		第1次調査
走り下遺跡	散布地	中世		なし		信楽産陶器片		第1次調査
長田遺跡	散布地	中世		なし		土師器焙烙、山茶碗		第1次調査
要 約	<p>小野城跡北東部の発掘調査を行い、中世の道路状遺構、屋敷地を確認した。道路状遺構は、調査区ほぼ全域を東西方向に走り、南に向かう道路状遺構も確認された。部分的にはあるが、波板状凹凸遺構や、硬化面も検出されている。</p> <p>道路状遺構や区画溝に囲まれた屋敷地からは掘立柱建物のほか、粘土が貼られたり、炭化物を多く含むような土坑が確認できた。また、中世以前の竪穴住居を1棟確認し、口縁部と底部を重ねた土管状土製品が出土している。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告 315-1

一般国道1号関バイパス建設事業に伴う

小野城跡発掘調査報告

—第4・5・6次調査—

2010（平成22）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 伊藤印刷株式会社
